

川崎市におけるコロナ禍での
非正規シングル女性に対する影響調査
— インタビュー調査報告書 —

令和 4(2022)年 3 月

川崎市男女共同参画センター(すくらむ 21)

目 次

第1章 調査の概要	2
第1節 背景と目的	2
第2節 インタビュー調査の実施概要	3
1-2-1. 調査対象	3
1-2-2. 調査方法	3
1-2-3. 実施期間・場所	4
1-2-4. 実施項目	4
1-2-5. 実施体制	4
第2章 インタビュー調査の調査結果	6
第1節 回答者のプロフィール	6
第2節 インタビュー調査結果	6
2-2-1. 仕事への影響	6
2-2-2. 生活への影響	15
2-2-3. 心身の健康への影響	22
2-2-4. 必要な支援のニーズと情報へのアクセス	28
第3節 テキスト分析による検証	37
2-3-1. 分析手法について	37
2-3-2. 非正規シングル女性の語り（若年者）	38
2-3-3. 非正規シングル女性の語り（中年者）	39
第4節 結果の考察	41
2-4-1. 仕事への影響	41
2-4-2. 生活への影響	42
2-4-3. 心身の健康への影響	43
2-4-4. 必要な支援のニーズと情報へのアクセス	43
第3章 課題の解決に向けて—非正規シングル女性への支援を考える—	44
第1節 検討委員による提言	44
第2節 男女共同参画センターでの事業への展開について	45
3-2-1. 気軽に立ち寄れる場所に窓口やサポートメニューの情報を用意する	45
3-2-2. 同行支援	46
3-2-3. フリーランスで働く方へのサポート	46
3-2-4. 情報発信	46
第3節 おわりに	47
謝辞	47
参考文献	48
資料	49

第1章 調査の概要

第1節 背景と目的

本調査レポートは、川崎市におけるコロナ禍による非正規シングル女性¹の暮らしへの影響を調べるために、インタビューの手法を用いてコロナ禍での仕事・生活・健康への影響についての生の声・生の意見を聞いたものである。アンケート調査だけでは見えてこなかった問題・課題を明らかにし、今後のセンター事業や市の施策へ反映していくことを目的としている。

その背景としては、コロナ禍において雇用の影響を受けたのが非正規雇用者であること、また2020年における非正規雇用者の割合は女性が54.4%、男性は22.2%であることから（内閣府(2021)）、女性の雇用がより打撃を受けていることが挙げられる。この現象をあらわす用語として、コロナ禍における経済不況と雇用急減を示す“*She-cession*”という造語も生まれた。これは、リセッション（*recession*）に伴う雇用喪失が、男性よりも女性に集中していることから名づけられている（周(2020)）。また、コロナ禍において女性の雇用減、収入減だけでなくエッセンシャル・ワーカーやサービス業比率の高い女性のコロナ感染リスクの高さ、家庭内におけるケア労働やDVの増加、自殺者の増加等がコロナ禍で顕在化している。これは、社会の構造に組み込まれていたジェンダー構造が作用していると近江(2021)は指摘している。

さらに近年、生涯未婚・シングル女性が急増している（前田(2021)）。国立社会保障・人口問題研究所(2018)の推計によれば、女性の生涯未婚率は2020年には17.5%に達しており、2025年には18.4%になることが見込まれている。前田(2021)によれば、未婚女性の2005年と2015年の状況を比較すると、雇用の非正規化が進み本人収入および世帯収入が減少している（前田(2021)）。さらに、中高年（40-59歳）未婚女性を対象として行ったマイクロデータの分析結果によれば、老後の不安として国民年金加入者が多いこと、保険料免除・未払いが約2割にのぼることから将来の年金受給額が低いか受給権がないこと、老後の備えをしていない女性が約2割にのぼること、老後の備えをしていると回答した女性のうち約4割が預貯金額ゼロであることを指摘している（前田(2021)）。

このような中、川崎市の非正規雇用のシングル女性はどのような仕事・生活を送ってきたのだろうか。本調査では、非正規雇用・シングル女性に焦点をあて、仕事への影響、生活への影響、心身の健康への影響、必要な支援のニーズと情報へのアクセスの4点を中心に、インタビューの語りをもとに検証する。具体的な実施方法として、モニター調査（アンケート調査）の回答者の中から協力者を募り、協力者の中から10名のインタビュー対象者を選定した。インタビューは世代により2つのグループにわけ、若年者・中年者

¹ 非正規シングル女性の定義は、非正規雇用（いわゆるパートやアルバイト、契約社員、派遣社員、嘱託社員など）（厚生労働省(2022)）で働き、かつシングル（独身（まだ結婚したことのない「未婚」及び配偶者と死別した「死別」、配偶者と離別した「離別」）（総務省統計局(2021)）である女性をさす。

各5名ずつにその現状を聞き取った。

モニター調査ですでに明らかになったこととして、コロナ禍で大変だった時期は正規女性、非正規女性ともに最も多いのは2020年4月～6月であること、初職の就業形態は非正規女性の42.2%は初職も非正規だったこと、年齢別にみると、初職がパート・アルバイトだった非正規の者の割合は、16歳から29歳では70.9%と年齢が低いほうが初職が非正規雇用の場合が多い傾向がみられたことなどがある。また職種については、非正規女性は事務職と接客・販売が3割程度であり、約7割は年収300万円未満であること、非正規女性で最も多かったのは100万円未満で26.8%だったことなどが挙げられる。これらの背景をもとに、次節以降で非正規雇用女性の現状をより詳細に検討したい。

また、今回のインタビュー調査をグループインタビューとすることで、調査対象者が発話する・話を聞いてもらう経験を得ることでエンパワーメントの機会となることや、参加者同士がつながる機会の創出をもめざした。

第2節 インタビュー調査の実施概要

1-2-1. 調査対象

調査対象者の選定については、川崎市が実施したモニター調査（質問紙調査）にご協力いただいた方に対してインタビュー調査引き受けの可否を尋ねた。そのうち、インタビュー可と答えた方の中から年齢、学歴、同居者の有無、現在の住まい、婚姻経験等の項目について様々な個人属性の方を選定する形で若年者、中年者各5名ずつ、計10名のインタビュー対象者を決定した。若年者・中年者の区分は若年者（25-44歳層）、中年者（45-60歳層）とした。若年者については応募のあった17名から5名に依頼し、中年者については同25名から5名に依頼した。個人属性としては全員子どもがいないシングル女性で、婚姻経験なし、離別経験ありの双方を含むインタビューイとなった。

1-2-2. 調査方法

調査方法はあらかじめ調査内容を決めたうえで全員に同じ質問を行う半構造インタビューの手法をとった。インタビューはグループインタビュー形式とし、5名のインタビューイに対し1人あたり15-20分程度、約90分のインタビューを実施した。事前の個人情報はモニター調査実施時にあらかじめ得ており、これをもとにインタビューを実施した。インタビューの際は実名またはニックネーム等、インタビューイの要望にあわせて発言を行ってもらう形とした。

インタビューは録音し、その後業者による文字起こしを行った。文字起こしによるテキストデータをもとに、執筆者が語りを類型化し、第2章第2節にまとめた。さらにテキストデータを計量テキスト分析（樋口(2014)）という手法を用いて追加的な分析（抽出語、共起ネットワーク分析）を第2章第3節にて行った。

1-2-3. 実施期間・場所

インタビュー調査の実施期間・概要は表1の通りである。若年者のグループインタビューについては2022年1月24日に高津市民館で実施され、中年者のグループインタビューについては2022年1月29日に川崎市男女共同参画センター(すくらむ21)で実施された。

表1 インタビュー調査の実施期間・概要

	インタビュー調査 (①若年者)	インタビュー調査 (②中年者)
実施日・時間	2022.1.24 (月) 18:15-20:15	2022.1.29 (土) 14:00-16:00
実施場所	高津市民館	川崎市すくらむ21
対象人数	5名	5名

出所：川崎市男女共同参画センター提供データをもとに筆者作成

1-2-4. 実施項目

半構造化されたインタビュー調査の実施項目は表2の通りである。おおむね1人あたり15-20分程度と時間の制約があったものの、それぞれの項目について全員に交互に発言を促し、回答を得ることができた。仕事への影響、生活への影響、心身の健康への影響、必要な支援のニーズと情報へのアクセスの4点を中心に、表2の項目について聞き取りを実施した。

「仕事への影響について」は現在の仕事内容、勤続年数、業種、職種に加え「コロナで仕事にどのような影響があったか」「テレワークや時差出勤等、柔軟な働き方について」を尋ねた。「生活への影響」については「コロナで収入が減少したか、現在の収入の状況」「コロナ禍における社会とのつながり、生活の楽しさの変化」を尋ね、「心身の健康への影響」については「精神的なストレスや病気」を尋ねた。最後に行政に対する「必要な支援のニーズと情報へのアクセス」を尋ね、「どのような支援があったらよかったか」「住まい、お金、仕事の面で具体的にどのような支援が必要か」「行政等の支援サービスを利用する際の障壁、また解消するためにどのような支援が必要か」「支援の効果的な情報の届け方について」を聞いた。

1-2-5. 実施体制

以下の実施体制にて検討会を開催し、調査を設計、実施した。

実施主体（調査設計、統括）

川崎市男女共同参画センター

検討委員（調査実施、執筆）

明海大学経済学部教授 寺村絵里子【第1章、第2章、第3章第1節、第3節】

川崎市男女共同参画センター（担当：脇本靖子、荒川泰輝）【第3章第2節】

調査検討会

2021年11月22日

表2 インタビュー調査の主な実施項目

インタビューの主な質問項目
<p>仕事への影響</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現在のお仕事内容、勤続年数、業種、職種を簡単に教えてください ・コロナであなたのお仕事にどのような影響がありましたか ・コロナでテレワークや時差出勤等、柔軟な働き方は可能となりましたか
<p>生活への影響</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コロナで収入が減少した場合、いつごろから減少しましたか。また現在は収入はどのような状況ですか ・コロナで社会とのつながり、生活の楽しさなどはどのように変化しましたか
<p>心身の健康への影響</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コロナで精神的なストレスや病気などはありましたか
<p>必要な支援のニーズと情報へのアクセス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どのような支援があったらよかったですか ・住まい、お金、仕事の面で具体的にどのような支援が必要なのか ・行政等の支援サービスを利用する際に障壁があるのではないか（心理的障壁等）。解消するためにどのような支援が必要か ・支援の情報が届いていないのではないか。効果的な情報の届け方について

出所：川崎市男女共同参画センター提供データをもとに筆者作成

第2章 インタビュー調査の調査結果

第1節 回答者のプロフィール

回答者の個人属性に関するプロフィールは表3の通りである。若年者の年齢は28歳から42歳までで、高校卒が1名、短大・高専卒が1名、大学卒が3名である。現在の住まいはひとり暮らし（賃貸住宅）が3名、同居者と同居（賃貸住宅）が1名、家族と同居（家族負担）が1名である。中年者の年齢は47歳から59歳までで、高校卒が3名、短大・高専卒が1名、大学卒が1名である。現在の住まいはひとり暮らし（賃貸住宅）が2名、ひとり暮らし（持ち家）が1名、その他が1名、家族と同居（家族負担）が1名である。

表3 回答者のプロフィール（上段：若年者、下段：中年者）

・ 若年者

	年齢	学歴	現在の住まい	同居者			
				ひとり暮らし	父	母	その他
A	28	高校卒業	賃貸住宅（自分が全額負担）	○			
B	30	大学卒業	賃貸住宅（自分が全額負担）	○			
C	37	短大・高専卒業	賃貸住宅（自分が全額負担）	○			
D	39	大学卒業	賃貸住宅（自分が全額負担）				○
E	42	大学卒業	持ち家（家族が全額負担）			○	

出所：川崎市男女共同参画センター提供データをもとに筆者作成

・ 中年者

	年齢	学歴	現在の住まい	同居者			
				ひとり暮らし	父	母	その他
F	47	高校卒業	その他	○			
G	49	大学卒業	持ち家（家族が全額負担）		○	○	
H	51	短大・高専中退	賃貸住宅（自分が全額負担）	○			
I	58	高校卒業	賃貸住宅（自分が全額負担）	○			
J	59	高校卒業	持ち家（自分が全額負担）	○			

出所：川崎市男女共同参画センター提供データをもとに筆者作成

第2節 インタビュー調査結果

インタビュー調査結果については、モニター調査結果にならい①仕事への影響②生活への影響③心身の健康への影響④必要な支援のニーズと情報へのアクセス、の4項目に分け、さらに若年者・中年者についてそれぞれ分析・考察を行う。また、非正規シングル女性の状況をよくあらわしていると考えられる部分について執筆者が下線をつけた。

2-2-1. 仕事への影響

モニター調査の結果によれば、正規女性、非正規女性ともに「特に仕事への影響はなかつ

た」が最も多く、それぞれ 45.3%、37.3% だった。ただし、非正規女性の 20.9% は「勤務時間（シフトや勤務日数）が減った」と回答した。また、「収入に影響があった」と回答した者の中で、収入がなくなった・半分より少なくなった・半分になった者は非正規で 51.5% と半数を超えた。

今回のインタビュー調査対象者のモニター調査の回答結果をまとめたものが表 4 である。個人の特定化を防ぐために集計値で表記している。若年者・中年者ともに初職は正社員であったものが各 2 名いる。また、現在の仕事は若年者がパート・アルバイトが 2 名、契約・嘱託が 2 名、自営・家族従業が 2 名となっている（複数回答有）。中年者についてはパート・アルバイトが 1 名、契約・嘱託が 1 名、業務請負が 1 名、自営・家族従業が 1 名、その他が 1 名となっている。就業年数（平均）については若年者が 14.0 年、中年者が 28.4 年、非正規就業年数（平均）については若年者が 6.6 年、中年者が 18.8 年となっている。業種は若年者がサービス業が 3 名、卸・小売業が 2 名、学術研究、専門・技術サービス業が 1 名（複数回答有）、中年者がサービス業が 3 名、学術研究、専門・技術サービス業が 1 名、その他が 1 名となっており、サービス業が多い。職種は若年者が事務職が 3 名、接客・販売が 2 名、専門・技術職が 1 名、教育職が 1 名（複数回答有）、中年者が事務職が 2 名、営業職が 1 名、専門・技術職が 1 名、その他が 1 名となっており、事務職が多い。

表4 仕事への影響に関する個人属性（モニター調査から）・年代別

		若年 G	中年 G
学校を卒業（中退）した後の最初のお仕事について伺います。当てはまるものをすべてお答えください。現在就学中の方は、卒業・中退に限らず、初めて就いたお仕事についてお答えください。	正社員・正職員	2	2
	パート・アルバイト	2	1
	契約・嘱託		1
	派遣社員		1
	自営業・家族従業	2	1
あなたの現在のお仕事について伺います。当てはまるものをすべてお答えください。	パート・アルバイト	2	1
	契約・嘱託	2	1
	業務請負等		1
	自営業・家族従業	2	1
	その他		1
これまでの就業年数について伺います。仕事をしていない期間がある場合は、その期間を除いて、これまで仕事をしている年数はおよそ何年ですか？／年		14.0	28.4
そのうち非正規（パート・アルバイト、契約・嘱託、派遣社員、業務請負）で働いていたのは何年になりますか／年		6.6	18.8
現在のお仕事の業種について伺います。複数の仕事をかけもちしている場合は、当てはまるものをすべてお答えください。	卸売業、小売業	2	
	学術研究、専門・技術サービス業	1	1
	サービス業（他に分類されないもの）	3	3
	その他		1
現在のお仕事の職種について伺います。複数の仕事をかけもちしている場合は、当てはまるものをすべてお答えください。	事務職	3	2
	営業職		1
	専門・技術職	1	1
	教育職	1	
	接客・販売	2	
	その他		1
2020年のあなた自身の年収（税込み）について伺います。年金なども含めたすべての収入について、当てはまるものを1つお答えください。／万円		210	210
2020年の世帯年収（税込み）について伺います。年金なども含めたすべての収入について、当てはまるものを1つお答えください。／万円		230	270
感染拡大前（2019年12月以前）から現在までの間で、仕事の面でどのような影響がありましたか。当てはまるものをすべてお答えください。	転職した	2	1
	失業した（会社側の原因により）	1	
	収入が減った	3	3
	勤務時間（シフトや勤務日数）が減った	1	3
	特に影響はなかった	1	

		若年 G	中年 G
以下の項目について、最も大変だった時期に感じていた不安感をそれぞれお答えください。／仕事	不安はなかった		
	あまり不安はなかった		
	どちらとも言えない		1
	やや不安	4	2
	不安	1	2
以下の項目について最も大変だった時期に感じていた不安感をそれぞれお答えください。／職場の人間関係	不安はなかった		2
	あまり不安はなかった	1	1
	どちらとも言えない	1	1
	やや不安	2	
	不安	1	1

注) 個人の特定を避けるために集計値・平均値を記載している。一部項目は複数回答項目可。

また、年収・世帯収入については各カテゴリーの中央値を用いて平均値を算出。

出所：川崎市男女共同参画センターモニター調査結果をもとに筆者作成

次に、質問の内容に沿って若年者・中年者のそれぞれの語りをまとめ、その特徴を概観する。

・ **若年者**

若年者の参加者のうち、仕事が減ったと回答した者が過半数をしめた。これは、時給制で働くためにシフトが減少したことによるケースと、個人事業主で仕事そのものが減少したケースがあった。収入が減少したことは痛手であったものの、業種によってはオンライン化による企業業績の向上や持続化給付金の活用、ダブルワークなど、様々な工夫により収入の減少のデメリットを補う努力を語っている。

・ **現在のお仕事内容、勤続年数、業種、職種を簡単に教えて下さい**

現在の仕事内容、業種、職種については次のように語っている。勤務日数・時間は週 3-6 日と、正社員と同様の労働時間であるケースが多かった。事務職・サービス職が多く、シフトの減少による収入減に伴いダブルワークを行っている者もいた。

私は販売店の事務員をしています。接客とかも伴うような仕事です。(業務内容は)
そのときによってなんですけれども。半分半分ぐらい。主には事務として採用されたんですけど。リサイクル業界です。(A)

美容医療系の経理事務です。(勤務は) 週 5 ですね。(B)

サービス業で、パーソナルトレーナーをしています。週 6 です。器具とかは使わないんですけど、ヨガマットを敷いて、そこで運動したりとか。あと栄養指導した

りして。(労働時間は1日当たり)4時間から6時間ぐらい。(週1日休みだと、それはそれで大変ですね)そうですね、でも個人的には朝から晩まで仕事をするというよりは、今のほうが合ってるかなって。(C)

演奏してお金をいただいて、確定申告をしてる個人事業主です。(労働日数は)相当、アップダウンがあるんですけど。平均して週3日か4日ぐらい。まあ3日ぐらいですかね。準備は、家で準備していたり資料送られて準備したりっていうこと考えると、それはきょう働いてきょう休みとは決めてないので、外に出て行かない日も仕事とするなら、休みがいつかよく分からないんですけど。そういう意味でいうと、週4から5って感じですかね。自宅の作業を加えると。(D)

販売員で、お菓子を売っています。ダブルワークで、もう1つ事務が業界だとレジャーになります。(ダブルワークをする理由は)そうですね、シフトがあまり入れないので。(シフトに)両方入れなかったりするので。(比率は)販売のほう
が7割。事務が3割ぐらいですかね。(両方すると週5ぐらい?)そうですね。
(E)

・コロナであなたのお仕事にどのような影響がありましたか

コロナ禍における仕事への影響については、詳細な語りがあった。仕事の減少による痛手を被る者が多い中、企業からの補償により収入が維持されたケースもあった。総じて仕事への影響は大きく、収入への影響も大きかったものの、後述する生活面、心身の健康への影響に比べ、仕事面における不満は比較的少ないように感じられた。また、収入面だけでなくコロナ禍で本来やりたい仕事に就けない、との声もあった。これらのストレスなどが語られたものの、勤務先の補償や給付金の申請、ダブルワークなど様々な工夫を重ねて仕事量の維持をはかっており、生活水準は大きく低下していない印象を受けた。

シフト制で事務員をしてるんですけども、そのシフトが時短になってしまったり、ちょっとカットされたりというので、勤務時間が減りました。お給料が減ってしまったんですけども。会社のほうでコロナの補助金みたいな制度を使っ
たいただいて、その分は保障して。あんまり変わらなかったかなって感じなんですけれども、少しは減っちゃったかなっていう。(中略)保障があったので助かったなっていう気持ちで過ごすことができました。(会社の業績は)オンラインの、ネットショップのほうの売上げが上がったっていう変化がありました。(A)

(2020年に関西から関東に転職・転居した)仕事は、前職も経理の事務職、転職先も経理の事務職なので、仕事自体は大して変わりもなく収入も大体、一緒ぐら

いなんですけども。ただコロナっていうので感染者とかの大きさを見ると、やっぱりちょっと関西でもよかったかなっていうのは、どうしても思ってしまう。職場の人以外と知り合う機会がないので、どっちかという人と会なみたいな感じなんで。だから家と会社の往復、土日は買い物ぐらい、みたいな。こっちに来て孤立感はちょっとありますね。(B)

私は自営業でパーソナルトレーナーのようなことをやっていて、最初の2020年4月、5月ぐらいから休業みたいになってしまって。そのときにスポーツクラブの一室とかを借りてやってたんですね。そこが全部キャンセルになってしまって。そのときのキャンセル料とかが結構かさんでしまって、大変でした。貸しスタジオとかを個人で持ってる方がいらっしゃって、そういう所に移って借りて、今はやっています。今は何とか生活できるくらいには仕事はあるんですけども。ワクチン打ったとかで体調がすぐれないからキャンセルしたい、そういう依頼も多くて。やっぱり不安定だなという感じがあります。(C)

私は楽器を弾いてお金をいただく仕事です。いわゆる個人事業主で、口約束でお仕事したり、たまに大手のどこから仕事がきてお金をいただいたりっていうところなので、仕事はコロナ禍の最初のときは本当に全部止まってしまったので、全く何もすることがなくなって。リモートとか動画撮影とかそういうことはやったんですけど、全くなくな。て。(中略)大きい仕事はほとんど、私は事務所にいないので回ってこなくて、小さいお店で弾くっていうふうな仕事に、より変化してって。収入に関してはもちろん給料制ではないので、仕事がない分、収入は減ったんですけど、個人事業主を対象にした給付金というか、持続化給付金だったりとか、今、月次支援金とかしていただいているので、トータルで見ると少し減ったけどあまり実は変わらないかなっていうところに今、落ち着いています。(D)

2019年に転職を考えていて、転職活動をしてたんですけど、コロナの影響で希望していた業種への転職がかなわなくなってしまったっていうのが、1番大きな影響です。もともと希望してた職種とは違うんですけども、運よく就職というかパートという形で仕事が決まったので、一応、無職にはならずには済んだんですけども。もともとやりたいと思っていたこととはかけ離れてたりして。仕事がかうまく続けられなかったりして、いくつか仕事を変わったりしています。シフトは当初聞いてたよりは日数が減ったりとか、同じようにシフト制なので、希望したシフト数、必ず入れるわけではなく、カットというかしょうがないというか。希望してる職種、業界が、旅行とか観光業だったので、やはりこの先も無理なかなっていう不安があ。って。今の仕事を続けていかざるを得ないかなって思っ

るところではあります。いつその仕事に就けるかっていう見込みが立たない。
(E)

・コロナでテレワークや時差出勤等、柔軟な働き方は可能となりましたか

テレワーク・時差出勤については時間の制約もありほとんど尋ねることができなかったが、自宅でテレワークを実施している者はいなかった。非正規雇用である上に事務職・サービス職が多いという職務の特性上、テレワークがなじみにくい職種についている者が多いと考えられる。

テレワークができない仕事なので、テレワークは行ってないです。環境が整えられればって感じなんですけれども、なかなか部屋とか機器の環境、Wi-Fi とかちょっとあまりって感じなので。 (A)

・ **中年者**

中年者の参加者のうち、仕事が減った、または失ったと回答した者が過半数をしめた。仕事を失ったことに加え、精神的な問題を抱え生活保護の受給を受けたケースもある。収入減、今後の見通しに関する不安感も強い。これまでも様々な困難を経験してきており、さらにコロナ禍による仕事上の困難を経験する者の語りが複数みられた。

・ **現在のお仕事内容、勤続年数、業種、職種を簡単に教えて下さい**

現在の仕事内容は、転職した者を除いてはある程度長期にわたり仕事を行ってきており、仕事上のスキル・ノウハウも蓄積されている。一方、コロナ禍で仕事を完全に失ったという者も複数おり、長年その仕事を続けてきただけに次のキャリアに対する見通しが立たないと感じていると思われる語りも見受けられる。年齢層が上がっていることから仕事の選択の余地も限られつつあり、その点に対する不安も語っている。

個人間で回って、こういうアンケートをちょっと協力してくれる方を探すっていう仕事です。コロナ禍になりましたらもう一切、仕事がなくなりましたので、リモートっていうこともできないもので、もうかなり収入面においても、減りました。 (F)

利用者の方がいて、その方のお振り込みとかを振り替えの作業のお手伝いをする。分からない方がいらっしまったときにそのお手伝いをするという事務をやっている。電話、もしくは端末上の仕事です。(G)

私はグラフィックデザインとかイラストとかの仕事を自宅でしています。イベント

関係の仕事をすることもあるので、そういったところからの仕事は、やっぱり減ったのは確かです。(H)

私はダブルワークとといいますか、会社をやっています。映像制作。コロナというのの10年前か、東北の地震のときから恒常的にもう不調になっていまして、仕事がどん詰まりということがあったので、その頃からアルバイトというか、派遣登録での販売みたいなこと、割としゃべりが好きですからそっちの仕事をしまして、(でも)コロナの後からは接客業はほとんど駄目です。あと、私の業界でいう映像制作、テレビ制作に関しては(中略)やっぱり大変は大変なんですよね。仕事がゼロですから。

ただ、私の場合は会社もやりましたし、去年は持続化給付金か、給付金みたいなものではつないでつないではここまで来れました。だけれどもこの先はちょっと不透明ですから。やっぱりそれで年齢が、やっぱりいざっていうときに仕事ないですよ。年齢で、いろんな所で求人とか出してても、私の年代の人を取ろうとは思ってないっていうことがあります。(中略)これまで何十年もやってきた仕事が駄目になってるっていう落胆はあります。ただ、元気にはしてますけど。(I)

今の仕事は補助金(申請補助)ですね。なんか補助金の中で1番難しいって言われてるんですが、派遣なんですけれども、派遣会社からちょっとお電話いただいて、リーダーシップをやってくれないかっていうことで、自分のチームの、難しいので分からないこととか答えてあげたりとか、勤怠とか、オペレーターのケアっていうか、ほぼしてるんですけれども。(リーダー職でもあり)残業ですね、毎日。(J)

・コロナであなたのお仕事にどのような影響がありましたか

コロナ禍で仕事への打撃は大きい。仕事量の減少だけでなく、仕事が全くなくなってしまった者の語りが複数見られた。また、誇りをもって長く続けてきた仕事を失ってしまったことに対する失望を語ってもいる。収入がなくなったことへの対処としては持続化給付金の受給などがある。しかし、若年者のケースと同様に、仕事の減少・喪失に関する悲壮感はそのままで感じられず、前向きに新しい道を模索している印象を受けた。加えて、より深刻な課題は、次節にて検証する生活面の将来不安に対する語りであることがうかがえた。

仕事を実際に動いていいのかって、指示がいつ出るのかも分からなかった。不安も当然ありました。もともと自分自身に精神的疾患みたいなものがあったって、ちょっ

と前向きに行動ができないところがありまして。(中略) 割とやっぱり話さない、人との接点がなくなってきたはいた中で、なるべく自分の精神的部分を、影響を受けないように、自分では意識して過ごすようにしていました。(F)

私は、緊急事態宣言下は通常だと月曜日から金曜日まで週5だったんですけど、それが1日おきの出勤になりまして、それで出勤しない、リモートがやっぱりできない職種なもので、出勤しないまま自宅待機という形になってました。(G)

アルバイトは全部キャンセルになりましたから、結局は。状況に波があるから、月に1回仕事もらってもしょうがないっていうのはありますよね。本当に接客は対策をどういうふうにしても、自分にも(感染の)リスクありますよね。とにかくすごい数の人がいろいろお店には来るわけで。でも、アルバイトは手取り早くお金になったので、それがコロナでなくなったっていうのが厳しいといえれば厳しいですね。

もう1つの販売の仕事も向いてたんですね。面白いし。人間観察もできる。それがぱたっと、人に接する仕事はもうぱたっとコロナでなくなりました。それを考えるともう絶望ですよ。だってもう展望がないんだもん。新規参入も難しいんですよ。これまでの人間関係もみんな高齢化していくし、それから業界自体の根本的な問題が解決されてないから。だから不況はもう二十何年、もう何十年ですよ。(I)

土曜日も出勤、残業、ゴールデンウィークも出勤だったので、もう本当にコロナで皆さんリモートしてるのに、私たちはこんな休みもなくっていう感じも、仕事だったんですけど。コロナ禍で、仕事に関して私自身、一言で言いますと自分のやりたい、希望する仕事ができないっていうところなんですけれども、具体的に申し上げますと、派遣で仕事を最初、某大学の秘書の仕事が決まったんですけども、このコロナ禍でイベントができないっていうことで、やっぱりその募集をやめましたっていうふうに言われてしまって。(中略) そういったことで自分がやりたかった仕事ができないっていうところが自分自身への影響です。(人とのつながりは) そうですね、なかなかできないです。(J)

・コロナでテレワークや時差出勤等、柔軟な働き方は可能となりましたか

中年者についても、テレワーク・時差出勤については時間の制約もありほとんど尋ねることができなかったが、業務請負で自宅で仕事をする者が1名、テレワークを実施している者が1名いた。しかし、テレワークを望んでいるわけではないようである。一方、コロナ感染防止の観点からテレワークを希望する声もあるものの、仕事の特性上難しいとの話

りもあった。職場でのコミュニケーションが減少しており、テレワークになるとさらにコミュニケーション阻害が起きることを懸念しているようである。さらに、後述するようにコロナ禍でシングル女性は話し相手の不在などのコミュニケーション不足を強く感じていることから、対面で一緒に仕事をすることを望む声も聞かれた。

(非正規雇用者のテレワークについて) 私はもう、そもそもテレワークはあまり性に合わないというか、職種的にも個人情報をお取り扱いする職種なので、およそおうちに持って帰ってできるお仕事ではないっていうのは分かっています(が、一部業務についてテレワークを会社から指示されている)。出勤して職場の仲間と一緒に仕事をするのが好きなので、私としてはできることなら100%出勤したいっていうのはあるんですけど、いかんせん会社が、出ちゃ駄目って言われてしまうとそれに従うしかない。(G)

やっぱり個人情報を扱う仕事なので、(世の中では)リモートとかはされていますけど、(私は)毎日出勤して、混み合う電車なんかで恐怖心を覚えながら毎日、もう1年以上出勤してるんですけども、そういったところでリモートしたいなと思ってもできない状況にあります。あと職場でも感染が広がらないように黙食で、終わってもすぐ家帰ってくださいねっていう、そういうちょっとコミュニケーションが取れなかったりとか、鬱々しちゃう状況ではあります。(J)

2-2-2. 生活への影響

モニター調査の結果によれば、2019年12月以前と比べて、最も大変だった時期の仕事への不安感是非正規女性で30.4%から62.4%になっており、ほぼ倍増した。現在の家計状態については、非正規女性はどちらかといえば苦しい・かなり苦しいを合わせて66.3%となっている。

年代別に見てみると、仕事への不安感や健康への不安感、将来・老後への不安感の高まりが最も大きいのは、非正規女性の16歳から29歳層であった。家族の介護や育児への不安感については、非正規女性の40歳から49歳の者が最も高かった。家族・親族関係への不安感、職場の人間関係への不安感については、非正規女性よりも正規女性のほうが高い結果となった。この結果からは、非正規女性の中でも若年者で仕事・健康・将来不安が高まっている一方、非正規シングルであることから家族・親族関係や職場の人間関係の不安は総じて少ないことがわかる。これは、シングルであるために金銭面、身体面ともに「身軽」であることや、正社員と異なり企業に強くコミットする必要が少なく、職場の人間関係が希薄であっても業務を行うことができる可能性が考えられる。

今回のインタビュー調査対象者のモニター調査の回答結果をまとめたものが表5である。個人の特定化を防ぐために集計値で表記している。若年者・中年者ともに家計への影

響は「特になかった」と回答した者が各2名ずついたが、若年者では「家賃の支払いに困った」が2名、「年金保険料の支払いに困った」が2名、「食費を切り詰めた」が3名、「日用品費の支出を減らした」が3名等（複数回答有）となった。一方、中年者では「家賃の支払いに困った」はいなかったものの、「年金保険料の支払いに困った」が1名、「食費を切り詰めた」が2名、「日用品費の支出を減らした」が2名（複数回答有）等となった。生活費で削られる部分は節約をしていた者が多いことがわかる。生活面については「かなり苦しい」が若年者・中年者ともに各2名、「どちらかというとき苦しい」が各3名、「どちらかというときゆとりがある」が各1名である。これは、親などとの同居の有無も関係しているようである。健康面の不安は若年者の方が中年者よりも不安の回答割合が高く、将来・老後の不安は中年者の方が若年者よりも高かった。家族の介護・育児や家族・親族関係については「どちらともいえない」が若年者・中年者ともに約半数程度となり、親族関係の悩みについては比較的少ない傾向がうかがえる。

表5 生活への影響に関する個人属性（モニター調査から）・年代別

		若年 G	中年 G
コロナ禍で家計にどのような影響がありましたか？ 当てはまるものをすべてお答えください。	住宅費（家賃、住宅ローン）の支払いに困った	2	
	水道光熱費や通信費の支払いに困った	1	
	年金や健康保険料の支払いに困った	2	1
	食費を切り詰めた	3	2
	日用品費の支出を減らした	3	2
	子どもの教育費の支出を減らした		
	医療費の支出を減らした	1	1
	新たな支出が増えた	1	1
お宅の現在の家計の状態についてどのようにお考えですか。当てはまるものを1つお答えください。	特に影響はなかった	2	2
	かなり苦しい	2	2
	どちらかといえば苦しい	3	3
以下の項目について、最も大変だった時期に感じていた不安感をそれぞれお答えください。／健康	どちらかといえばゆとりがある	1	1
	不安はなかった		
	あまり不安はなかった		
	どちらともいえない		2
	やや不安	4	3
不安	1		

		若年 G	中年 G
以下の項目について、最も大変だった時期に感じていた不安感をそれぞれお答えください。／将来・老後	不安はなかった		
	あまり不安はなかった		
	どちらとも言えない	2	
	やや不安	1	2
	不安	2	3
以下の項目について、最も大変だった時期に感じていた不安感をそれぞれお答えください。／家族の介護や育児	不安はなかった		1
	あまり不安はなかった	1	
	どちらとも言えない	1	2
	やや不安	2	
	不安	1	2
以下の項目について、最も大変だった時期に感じていた不安感をそれぞれお答えください。／家族・親族関係	不安はなかった		
	あまり不安はなかった		
	どちらとも言えない	2	3
	やや不安	2	1
	不安	1	1

出所：川崎市モニター調査結果をもとに筆者作成

次に、質問の内容に沿って若年者・中年者のそれぞれの語りをまとめ、その特徴を概観する。

・ 若年者

収入減少に対する語りが少ない一方、社会とのつながり、生活の楽しさの大幅な減少に関する語りが多いことが印象的であった。生活面において、非正規シングルの孤立・孤独があぶりだされた語りであった。以下、コロナ禍において生活面にどのような変化が起き、生活上の困難を抱えているかを検証する。

・ コロナで収入が減少した場合、いつごろから減少しましたか。また現在の収入はどのような状況ですか

コロナ禍で収入が減少した者が多かったものの、収入に関する語りは比較的少ない傾向にあった。今回語りのあった2名については、収入面の減少や問題点は特に見受けられなかった。フリマアプリの活用など、様々な方法で収入源の複数の確保をはかっている。

収入は、会社もさっき言った通り補助金とかで賄ってくれたので、すごい大きく減ってしまったとかはなかったんですけども、多少の揺らぎはあって。おうち時間が増えたのでいろいろ要らないものとか片付けとかをして、出てきたものをメルカリとかフリマアプリで売ってみたりとかして、その分ちょっと足しになったかなみたいな感じで、何とかやりくりは自分なりにできたかなと思って。(A)

コロナ禍で収入が減ったとかはないですね。同じぐらい。(何か家計で削ったも

のなどは) 特にないですね。そうですね。そこはもう貯金で賄えたので、もうお金ないわ、みたいな状態ではなかったですね。(B)

・コロナで社会とのつながり、生活の楽しさなどはどのように変化しましたか

収入面に関する語りと対照的に、社会とのつながり、生活の楽しさの減少に関する語りは多く確認された。友人・同僚・(インタビューによっては家族) 等とのつながりが断絶し、ライブや観劇、食べ歩き、登山等の対面活動を伴う趣味もほぼ楽しむことができていない。これらの well-being を高めるための活動が大きく制約されていることに対する不満・ストレスが大きいことがうかがえた。生きるための衣食住をこなしているだけで、人生の楽しみを奪われた気持ちになっている語りが複数確認された。特にひとり暮らしの場合、話す相手がいないために孤独・孤立を感じるとの悩みは多い。当初予想していた仕事・収入に関する困難よりも、このような生活面における社会的な活動の制約に関する不満がより大きく表出しているように感じられた。

生活ぶりは、外に外食もできなくなっちゃって、飲みに行くこともできなくなっちゃったので、交際費とかがかなり削減されて。その分手持ちに残るかなって思ったんですけど、おうちで飲むことにはまってしまって。(趣味がなくなることで生きがいもないですか?) そうですね。家賃以外に大きい出費が食費みたいになって、なんか本当に衣、食、住みたいなので。(A)

やっぱりひとり暮らしだと人と話す機会が減ったのと、あとは例えば自分のきょうだい、家族がみんなコロナにかかってしまったりとか、そのときに子どもどうするとか。気軽に人と会えなくなったことが、1番ストレスです。お金は結構どうにかなるかなっていうのがあるんですけども。(家族とは会えているか) 実家でいうと30分ぐらいの所なんですけれども。去年は1度しか。(友人とは会えているか) 1人2人、高校時代の友達と会っていて、その他はほとんど会えてなくて電話とか。

本当に最初のころ、スポーツジム関係と、あと自営業の人の収入、一気に減ったみたいなニュースやっていて。それで (賃貸住宅を) 誰も貸してくれなくて。そのときは友達のおうちにしばらくいさせてもらって (中略) そのときのメンタルが1番つらかったですね。今とかは逆にもう何があっても平気というか。(C)

そうですね、ペットを飼ったってことはプラスなほうで。どこにも外出はほとんどしないので、趣味とかは何も持たなく、逆になってしまって。趣味を捨てた。コロナ前は、一緒に、ライブに行ったりとか演劇見たりとか、あとカフェ巡りとか。結構、外に出歩くのが好きだったのかなと思うんですけど、最近はも

う、この2年間は何もしない。何もしないから何も、無というか。ストレスと思わないようにも、活力がないっていうか、新しいことを発見しようっていう気持ちがない。前はライブとかも新しいアーティストとかとの出会いとか求めて、YouTubeとかで音楽聴いたりとかちょっと街中で聞いてみたりとか結構してたんですけど。そういうところがシャットダウンして、新しいものを入れないようになってしまったっていうか。そういうところがむなしい感じになってますかね。生きがい、そうです。楽しみをどこに見つけなければいいんだらうって、ふと思うときがあります。食べて寝て、また仕事行って帰ってっていうの繰り返しですかね。飲み歩きももともとそんなにはしてないですけど、飲み会とかもないです。友人も会わないです。母がいるので2人ですけど、ひとり暮らししてたらどうなったのかなっていうのが、ちょっと今、ふと思いました。(E)

・ **中年者**

若年者と同様に収入減少に対する語りが少ない一方、社会とのつながり、生活の楽しさの大幅な減少に関する語りが多いことが印象的であった。加えて、将来不安に対する語りも織り交ざり、非正規シングルの不安感があぶりだされた語りであった。以下、コロナ禍において生活面にどのような変化が起き、生活上の困難を抱えているかを検証する。

・ **コロナで収入が減少した場合、いつごろから減少しましたか。また現在は収入はどのような状況ですか**

コロナ禍で収入が減少した者が多かったものの、若年者同様に収入に関する語りは比較的少ない傾向にあった。今回語りのあった2名については、収入面の減少がみられたものの、収入減を補うための具体的対処に乏しい印象を受けた。

一応、収入は100%を保証するというので頂いてはいたんですけども、ただ、この第6波に来たら、うわさなんですけれども、(給与が)70%になってるっていう話は聞いていて、今現在、非正規は一応100%の出勤ということで、出勤をしてるので当然収入も100%は頂いてるんですけど、正社員の方は7割出勤になっていて、その分、収入も(正社員は)カットされているという話は聞いています。次にカットされるとしたら非正規も来るのかなっていうところは不安ではあります。(G)

(仕事量・給与について)減りました。もう(コロナの)始まりのぐらいからちょっと危なくはなってきました。(現在の状況は)変わらないです。(今後の見通しは)立ってないです。(H)

・コロナで社会とのつながり、生活の楽しさなどはどのように変化しましたか

若年者同様に、収入面に関する語りと対照的に、社会とのつながり、生活の楽しさの減少に関する語りが多く確認された。友人・同僚・(インタビューによっては) 家族等とのつながりが断絶している。一方、ある程度年齢を重ねているせいも、自宅に居ながら部屋の模様替えやポイ活²、インターネットによる語学学習、ボランティアなど、自分なりの楽しみを見出している者も複数おり、コロナ禍でも自分なりの生活の楽しさをうまく見出している。一部の新しい取り組みは収入源にも結びついており、コロナ禍においてもたくましく新たな自身の人生の楽しみを見出している。

ただし、ひとり暮らしの場合は、若年者同様に話す相手がいないために孤独・孤立を感じるとの悩みも語られた。一方、シングルであるが故の感染症対策の容易さや身軽さなど、メリットもあるとの語りもある。総じて、若年者の悩みに加えて中年者の場合は将来不安が重なり、漠然とした不安感を抱えているようであった。

私の場合、もともと家でなんかするほうでも苦にはならないというか。だから家の中で、ちょっと部屋を変えてみようかなとか、それこそ掃除してみようかなとか。あと、料理をちょっと違うのを作ってみようかなとか。そういう家でできるようなことをやって、それがリフレッシュといえばそういう感じかなって思います。(中略) 先ほどのお話の災い転じてじゃないですけど、これをきっかけに不幸だけを見るんじゃないかと、ここからまた違う何かができるんじゃないかっていうこと、その考えるきっかけにはなってますかね。(F)

私はコロナで大きく変わったコミュニケーションのストレスとしては、外食がもう全くと言っていいほどできなくなってしまった。もともと食べるのが結構好きだったので、外に食べに行けなくなった分、当然、うちで食べる頻度はその分上がってきて。それで今、こういうネットの時代ですから、自分が食べた物をレビューするっていうサイトがあって、レビューするとポイントがもらえるですね。ポイ活みたいな形で最初は簡単に始めていて、近くのスーパーで買って来たスナックでもいいし、それについて自分が感想を述べるっていうことで、毎週1回選考みたいなのがあって、いいレビューに選ばれるとさらにポイントがもらえるので楽しくなってきました。

インターネットっていうものを通じて、(中略) 自分の趣味プラスつながれるので、そんなに私は(コロナ禍の外出自粛は) 苦じゃないかもしれないです。

² ポイ活とは、ポイントを効率よく貯めて使うことを指し、スーパーやコンビニ、ネット通販などで貯めたポイントをもとにお得に買い物ができたり、特典を受け取ったりする活動のこと(伊予銀行(2022))。

そうですね。非対面で、コロナ禍に応じては、やっぱりネットは今、欠かせないかなとは思いますが、いろんな意味で。(G)

私は基本的にもうスーパーインドアの人間で、こういう機会がなければ半分引きこもりみたいな生活をしてますので、コロナだからといってその辺は変わりません。でも仕事が減りましたので時間が空きまして、まだそんなに自分で深刻ではなかった2年前に、インターネットで、無料でやってる英語の学習アプリですか、ああいうのも始めたらはまってしまいました。もうちょっと勉強して、もしかしたら海外の人と今はネットで取引ができますから、そういうこともできるようになったらいいなというふうな気持ちの変化はあります。(中略) 本当はやりながら、仕事を取るための営業もしなきゃならないのになと思いつつそっち(英語学習)のほうをやっちゃってるので、自分で抱え込む部分と、楽観的な部分っていうのがこう、相反することをやってるなっていう状況です。(心身がリフレッシュできる場合は自宅ですか) そうですね。(リフレッシュできる場を行政がお膳立てする必要はないか) それは一切ないです。(H)

自分の中で、矛盾してるところもあって、社交性があるっていうか、人と話をするのも好きですけど引きこもりでもあるし。だからほっとけば何日も外、出なくて平気なんですよ。ひとり遊び、好きです。だからリフレッシュっていう形で、あえてなんかアクティブにしようっていう気もあんまりないです。だからなんか映画見に行こうとかどうしようとかっていうよりは、うちでNetflix見ようみたいな。じいっとNetflix見てたりとか、全然平気なんですよね。

今は川崎市でボランティアをやっていて、地域猫に、それこそ明け方に餌やりに。人に会わないようにして猫に餌やりに行くんですけど、でもそんな時間でも必ず人に会うんですよ。やっぱ都会ですね。だから何となくそういうのも含めてエンジョイはしてるでしょうね。ある日突然じゃないけど、ずっと続く命でもないし、それかといって100歳まで生きるかもしれないからどうしようっていうのあるんですけど、その状況も含めてちょっと楽観的に、まあいいかって、やっとか、もう、人生このままでもいいかとか。(I)

私自身、すごく趣味が多くて、(中略) 社内で黙食っていうのもありますし、会社が終わってお友達とご飯行ったり飲みに行ったりっていう、そういうものも全くできなくなって、だんだん、やっぱりひとり暮らしなので、そういうのがないとおうちで誰ともしゃべらない。会社に行けばしゃべりますが、もう緊急事態宣言で、リモートとかしてると本当に誰ともしゃべらなくて、自分の中で殻っていうか、こもっちゃうみたいな。ストレス発散する場がなくなっちゃったって

いうところがすごく多くて、仕事をしてても、旅行に行くから頑張ろうっていう、そういう目標みたいのもなくなってしまったみたいなところがあって、やっぱりコロナで、生活面での影響なんですけども。

私はひとり暮らしなので、先ほども申し上げたように、やはり言葉を発しない時間が多くなった。会社と家の往復にほとんどなってしまって、アフターファイブに食事に行ったり、飲みに行ったり、誰かとそういう一緒に行動するっていうことがなくなってしまったので、ちょっとなんかこもっちゃうみたいなところがあって。逆に家族がいないっていったところで、感染しても私自身しか影響がないので、ちょっとその点は精神的に楽になって。高齢の親とかと一緒に住んでると、ちょっと自分自身、感染すると怖いので、そういった点ではひとり暮らしでよかったのかなっていうのはあります。(J)

2-2-3. 心身の健康への影響

モニター調査の結果によれば、非正規女性の不安感については、不安感の高い順に将来・老後、健康、仕事、家族の介護や育児、家族・親族関係、職場の人間関係の順だった。また、非正規女性の年代別では、16歳から29歳の比較的若い層が仕事、将来・老後、健康に関して最も大変だった時期に7割を超える者が不安を感じていた。さらに、非正規女性の50歳から59歳の者も、将来・老後と健康に関して、7割を超える者が不安を感じていた。コロナ禍による心身の変化は、正規女性、非正規女性でスコアに大きな差はみられなかった。悩み・不安の相談先については、非正規女性の5人に1人は相談できる相手がないと回答しており、相談できる相手がいる場合は、非正規女性で多かったのは家族・親戚45.4%、友人・知人42.8%だった。

今回のインタビュー調査対象者のモニター調査の回答結果をまとめたものが表6である。個人の特定化を防ぐために集計値で表記している。コロナの拡大により生じた心身の変化については若年者で「孤立感がついた」が4名、「気持ちが落ち込んだ」が3名、「眠れなかった」が1名、「特に変化はなかった」が1名（複数回答有）であった。中年者は「気持ちが落ち込んだ」が2名、「眠れなかった」が1名、「特に変化はなかった」が1名、「その他」が2名であった。インタビューにもあるように、若年者の方が孤立感を募らせており、中年者はひとりで過ごす術を身につけ、自分なりの楽しみをうまく見出していた。悩み・負担の相談先は若年者が「友人・知人」が4名、「家族・親戚」が3名であり、中年者が「友人・知人」「家族・親戚」が各2名、「民間の相談機関」「行政の相談機関」が各1名、「相談できる相手はいない」が2名であった。若年者の相談先は友人知人、家族親戚に偏る一方、中年者は行政・民間の相談機関への抵抗感は比較的少ない印象をインタビューからも受けた。また、相談相手がないことに対する耐性も身についており、自分自身で問題を解決する、との語りもあった。

表6 心身の健康への影響に関する個人属性（モニター調査から）・年代別

		若年 G	中年 G
コロナの拡大により生じた心身の変化について伺います。具体的にどのような変化がありましたか？当てはまるものをすべてお答えください。	眠れなくなった	1	1
	気持ちが落ち込んだ	3	2
	孤立感がつづいた	4	
	死んでしまいたいと思うことがあった		
	その他		2
	特に変化はなかった	1	1
あなたは悩みや不安があるとき、誰に相談していますか？あてはまるものをすべてお答えください。	友人・知人	4	2
	家族・親戚	3	2
	民間の相談機関（医者、カウンセラー含む）		1
	行政の相談機関		1
	子どもの学校の先生・カウンセラー、保育士、発達センタースタッフなど、子育てにかかわる専門家		
	ケアマネージャーなど、介護にかかわる専門家		
	その他		
	相談できる相手はいない		2
	相談するのを感じない		

出所：川崎市男女共同参画センターモニター調査結果をもとに筆者作成

・ **若年者**

若年者の心身の健康への影響は主に心の問題にあった。社会とのつながり、生活の楽しさを奪われてしまったために孤独を感じ、衣食住のみの暮らしの中で楽しみを見出すことが困難になり、無気力感を感じている者もいる。また、親族の心身の健康に関する気配りへの疲れや家族関係の見直しからペットを持つようになるなど、人間関係への配慮と見直しが行われていた。自身の体の健康面を損なうケースは確認されなかった。

・ **コロナで精神的なストレスや病気などはありましたか**

若年者の語りの傾向として、精神的なストレスを抱えてはいるものの病気に関する語りは見受けられなかった。精神的なストレスには大きく2つあり、1つはコロナ禍で人と会うことができないことによる孤独のストレス、もう1つはその中で付き合いしていく必要のある職場、顧客、家族親族といった人々への気配りに対するストレスである。友人とも配慮しあい、コロナ禍で会えないストレスを語るケースも複数見られた。コロナ禍における人間関係の変化に、若年者は敏感に対応し配慮している様子が見られた。さらに、コロ

ナ禍で仕事が減少したことにより、自身の仕事の存在意義を見出せなくなったとの悩みを語る者もいた。また、同居親族者や同居人がいると、関係が良好な場合は話し相手がいることによりストレスが解消されるケースもあるようである。

私もひとり暮らしをしてるので、家庭内での会話っていうのがないので、ちょっとそこは寂しいかなっていう気持ちは強く出てしまってます。もともと人と話したり一緒にお酒飲んだりとかするのがすごい好きだったので、そういう機会とかも、居酒屋に行くとか誰かの家でっていうのもできなくなってしまったので、そういう面ではちょっと寂しいし、発散する場所とかがなくなってしまったのは寂しいなと思ってて。(Zoom飲み会は)やらなくなってしまいましたね。あと仕事柄、販売店なのでいろんなお客さまとかがいらっしゃるんですけども、(中略)(顧客の)男性が結構、攻撃的。女性は発言がきつめになりがちっていう感じですね。

家族は実家が近いので行きたい気持ちはあるんですけども、やっぱり高齢ということもあって、何か万が一あったとき怖いので、電話とかで連絡は頻繁に取るようにしています。友人はコロナ禍前は月1回ぐらいとかに、地方の友達とよくお互いに行き来して会って遊ぶとかしていたんですけども、それもやっぱり怖くてできないねっていうことになってしまったので、友人と会えないストレスっていうのも強く出てます。(A)

2年前、2020年秋ぐらいにこっち(関東)に来て、知り合いもほとんどいないので、今までのコロナがはやる前までは月1とかで東京来て、ライブに行くとか舞台見に行くとか、行ってたんですけども、それがなくなっていくかできないというか。だから寂しさはすごいあって。どこもコロナで、あんまりやる気とか出ないですね。(趣味の楽しみも奪われてしまって)そうですね。(今、ライブはいけない状態ですか)そうですね、不安もありますし。ひとりでぶらぶら、観光じゃないですけど買い物しに行くぐらいですね。(関西には帰れていますか)この間のお正月に、1年以上、こっちに来てから1回も帰っていけなかったので1年以上ぶりに帰って。かなりの居心地の良さを感じてしまって。余計に戻りたくなりましたね。(B)

家族がコロナの後遺症でほとんど寝たきりになってしまって、1日数時間しか起き上がれなくて。2人の子がいるので、そこで家事をしたりして休みの日は過ごしています。その後遺症といっても、まだちゃんとよく分かってないみたいで、子どもたちもストレスがたまってる。結構、子どもたちのメンタルも見ていて心配だと思って思うところはあります。やっぱり家族みたいに距離が近いと、精神的な甘

えとかが出ていろいろ言ってしまうたり言われたりとか。そこら辺が今はつらい
ですね。そうですね。仕事はもう自分が生活できれば今はいいかなという、コロ
ナが落ち着くまでは思っているの、そんなにメンタルの浮き沈みはないんです
けれども。家族が具合悪くて、子どもたちも気分が不安定っていうほうが、私に
っては心配になってしまうところが大きいです。(C)

私はひとり暮らしではなくて、結婚してないですけど一緒に住んでる方がいるの
で、子どももいないので、すごい悩んだりとかっていうことはありがたいことに
あまりなくて。ただ、エッセンシャル・ワーカーっていう方に比べれば、この
(自分の)仕事って今やんなくていいよねみたいに言われてるようで(悩む)。私
も年齢も重ねて今後どうしようとか、一応お仕事で今やらせてはいただけてます
けど、業界が縮小していくのが続くようだ、この仕事をやっていいのかな
みたいな、漠然と(悩む)。今はいらないよって言われてる感じがして、もちろ
ん配信でいろいろアーティストの方はやってるんですけど、その後ろで弾く私た
ちは今、何かをっていうのができないので、どうしよう、今できることは何だろ
う、みたいな。(D)

私も精神的なストレスは割と少ないほうだと思う。生活は母と2人暮らしなんで
ですけど、割とうちの母が明るいとか前向きな人なので、その影響もあって親
子関係も良好なので、お母さんとしゃべったり一緒に食事もずっと2人で取って
るので、家族には恵まれてるっていうんですか。新しくこの生活の中に、母親が
ちょっと近所を散歩するようになって、そこで出会った人の中に猫とかのボラン
ティアやってる人と出会いがあって。その縁で猫を飼うことになったりとか。新
しい社会とのつながりは生まれたのかなというのは、ちょっと思っています。
(中略) 人との出会いがありました。ペットがいると、子どもではないですけど
母にとっては子どものような感じで、母も生き生きとしてますし。会話が增えま
したね。友人とは本当に会ってないですね。連絡は取り合うけど、お互い家族が
いる子も多いので、ちょっとやめとこうかみたいな感じで。1人か2人、1年に1
回会ったかなぐらいで。長い付き合いの子が多いので、長い年月、これから先あ
るから、今会わなくても大丈夫だよねっていう、そんな間柄でいますね。(E)

・ **中年者**

中年者はひとり暮らしに慣れており、精神的なストレスは若年者に比べ少ない印象を
持った。病気などはないが、体力面の低下から仕事がきつくなっている語りもみられる。ま
た、中年者については、今後の将来の見通しが精神的なストレスに影響を与える可能性を
考え、将来見通しに関する質問を加えた。

・コロナで精神的なストレスや病気などはありましたか

コロナ禍における中年者の精神的なストレスは、若年者と比べると自身で解決できる術を身につけている。体の病気については若年者同様に語りは確認されなかった。ひとり暮らしの場合はひとりで暮らす身軽さを語る一方、同居者がいる場合は同居親族も高齢化しており、感染のリスクに細心の注意をはらっている。中年者に対して行った将来の見通しについては、ひとりで身を立てるために体が動くうちは働きたいという意見が多数を占めた。一方、自身の仕事内容に関する将来像は漠然としている。

私もひとりですと、親を感染させるっていうことも気にすることもないのでそこはよかったなっていうのと、例えば自分が感染をして、食べる物とか実際そうなたらどうなるかなっていうのは、そこは困るといえば困ることもあるのかもしれないんですけど、そこまで自分もあんまり考えてはない。（中略）私が今携わって社長からは定年がやっぱりないから、体が動くんだっただけずっと続けられるから体だけは気を付けて、健康管理だとか気を付けてというふうには言われてます。それこそ100年時代ともいわれてますが、何か自分ができることで、社会に何か影響というか、別に大げさなことじゃなくて、自分の身近なことでも何かできることを、それがたまたま仕事につながって収入になればそれはそれでいいです。（F）

私は両親と暮らしておりまして、何人かの方から高齢の親と一緒にじゃなくて安心だったってお話もあったと思うんですけど私はその逆で、（中略）自分が菌を持って自宅に帰り、両親に万が一うつしてしまっただけならもう最悪の事態だっていうのは思っていました。よく聞くお話ですけども、家族と良いコミュニケーションが取ればいいんですけど、両親の何だかんだを抱えなくてはならない時間もあって、楽しいときもあったんですけどしんどいときもありっていうのはありました。私も体力的なものを考えて、（将来の仕事は）自分ができる範囲で60とか65とか普通のところで、いったん今の仕事は見直してみるのかもしれない。ただ、現実問題、そのときが来てないと分からないところはあるんですけど。（G）

コロナで最初の頃に、例えば感染して、重症だったら入院しなきゃならない。でも軽症だったら自宅待機になる。そのときに、買い物、自分でしか行けないんだからどうしたらいいんだろうっていうことになって、そのときにはカップラーメンとか一時期、買いためはしました。けど、他の市では、もし自宅待機とかになっちゃったら、市のほうから簡単な簡易食を送ってくれるとかって聞いたので、そこまで切羽詰まってやらなくてもいいのかな。インドア派なので、特に精神的

な、外に出られない、人と接していない、ひとりでうちの中で鬱々とするとかって、そういうことはないので。高齢の親と離れてることで、逆に今はかえっていいのかなとは思ってますけどね。定年がないので、私も同じく働かないで暮らしていけるのならば働かないです。ただ、働かざるを得ないだろうからやると思います。1番いいのは、やっぱり9時5時で終われる、自分でコントロールしてできればいいんですけど、難しい仕事ですから体力的にどうかなっていうのはあって、(中略) 地道に働いていくしかないから、手と頭が動く限りはやるんだと思います。(H)

私もひとり暮らしがずっと長くなっていて、今もひとり暮らしです。ここ近年で自分も年取ってきて仕事も先細りなのでダウンサイジングして、今、だいぶ(家賃は)安くはなっているんですけど、このまま今の家賃が継続して払っていけるかなとか。年齢が上がっていくといろいろな不安はありますよね。コロナっていう点では、ひとりっていうのは皆さんおっしゃるとおり、トラブルも今までかかってもないし、なんもないしっていうこともある。でも孤独死っていうか、死んだって誰も気にしないんだよねっていう話は覚悟の上っちゃ覚悟の上ですよ。だから今、見守りの何とかとか、なんかいっぱいいろいろなのがあるでしょう。いくら払うと身を守ってくれてっていうとか。(でも) ひとりでなんでもやってますから。なんでもひとりでやっています。いや、いい年したら仕事したくないですよ、はっきり言って。だけど働かないとやっていけないから働くじゃないですか。だから働けるまで、体動くまで、取りあえず年金だつてあてにできないしとかいろんなこと考える。働かないでいいっていうだつたらもう実際にはしんどいですし働きたくないです。(中略) もう 50の声を聞いたときから、もうそれは仕事とかあんまりしたくないですね。アルバイトだつてずっと立ちっ放しで7時間とか8時間とかいうと、やっぱりしんどいですもん。(I)

(感染のリスクを考えるとひとり暮らしの方が) 気が楽ですね。なるべく社会と接してもいいし、頭も使わないとぼけていくっていうところもあると思うので、働いてはいたいんですけどもフルタイムではなく、週4日とか、そういうふうにして、あとは自分の趣味をやったりですとか、ちょっと社会に還元、ボランティアとかをやりながら、できれば体力が続く限りは働いていたいなっていうのもあります。日本は今後、年金がどれくらいもらえるのかって、年金だけで生活していけないのではないかっていうのは思っているんです。それを結構早いうちから感じていて、そういう個人年金とかは入っているんですけども、やっぱり少しは働かなきゃ駄目なのかなっていうのはあるので、今の段階で何歳までっていう明確なスケジュールはないんですけども、できる限り働いていたいって

うふうに思います。(J)

2-2-4. 必要な支援のニーズと情報へのアクセス

モニター調査の結果によれば、生活支援制度の認知度は非正規女性のほうが正規女性より認知度が高い結果を得た。全体で認知度が高かった順にあげると、生活保護 31.5%、国民年金保険料の免除・猶予 25.6%、生活困窮者自立支援制度 20.3%、新型コロナウイルス感染症生活困窮者自立支援金 19.3%等であった。認知している生活支援制度を利用しない理由として最も多かったのは「自分が申請対象かどうか分からない」であった。仕事に関わる支援提供機関や制度の認知度についても非正規女性のほうが正規女性より認知度が高い結果を得た。全体で認知度が高かった順にあげると、ハローワーク 42.2%、休業手当 39.3%、傷病手当金 29.0%、新型コロナウイルス感染症対応休業支援金・給付金 28.1%、雇用調整助成金 24.3%等であった。ここでも制度を利用しない理由として最も多かったのは「自分が申請対象かどうか分からない」であった。必要だと思う支援については、半数を超える人が「心身がリフレッシュできる場」が必要と回答した。その他、給付金・支援金・休業手当などの金銭的な支援 50.7%、支援機関や制度についての情報提供 41.6%、支援についての情報やアドバイスをもらえる機会 40.4%等であった。支援の情報収集経路については、正規女性、非正規女性を問わず、インターネットで情報を検索すると回答した者の割合が最も高く、次いで行政や支援機関のサイトであった。また、SNS で情報を見ると回答した者の割合は、若いほど多くなっていた。

今回のインタビュー調査対象者のモニター調査の回答結果をまとめたものが表7である。個人の特定化を防ぐために集計値で表記している。若年者・中年者ともに生活支援制度を利用しなかった理由は「自分が申請対象かどうか分からない」が若年者2名、中年者1名、「支援を申請・利用することに心理的な抵抗があった」が若年者1名、中年者2名と多い結果となった。仕事に関する支援制度を利用しなかった理由は「自分が申請対象かどうか分からない」が若年者2名、中年者1名、「支援を申請・利用することに心理的な抵抗があった」が若年者1名であった。情報へのアクセスに関する質問は、今回のインタビュー回答者についてははっきり年代で傾向が分かれる。若年者で最も多いのはインターネットで3名、その他行政機関のサイト、行政機関のチラシ・パンフレット、SNS、家族・知人からの口コミが各1名であったが、総じて情報を得たり、集めたりするルートは少ない。これに対し、中年者の情報収集ルートは複数かつ活発である。インターネットが5名、行政機関のサイトが4名、行政機関のチラシ・パンフレットが3名、SNSが3名、家族・知人からの口コミ、相談機関からの案内・紹介が各2名、ラジオ・テレビが1名である。中年者は様々なルートから情報を得ていることがわかる。

表7 必要な支援のニーズと情報へのアクセスに関する
個人属性（モニター調査から）・年代別

		若年 G	中年 G
生活支援制度について「知っているが、利用しなかった」と回答した方に伺います。利用に至らなかった理由は何ですか?理由に特に当てはまるものを最大3つまで選んでください。	自分が申請対象かどうか分からない、または、分からなかった	2	1
	利用方法がわからなかったり、手続きが複雑であきらめた	1	
	準備・申請する時間なかった		
	支援を受けられるまでの期間が長く待てなかった・あきらめた		1
	このような支援を申請・利用することに心理的な抵抗があった	1	2
	支援内容がニーズに合っていなかった		
	必要がなかった		
	該当しなかった		
	その他		1
仕事に関わる支援制度を「知っているが、利用しなかった」と回答した方に伺います。利用に至らなかった理由は何ですか?理由として特に当てはまるものを最大3つまでお答えください。	自分が申請対象かどうか分からない、または、分からなかった	2	1
	利用方法がわからなかったり、手続きが複雑であきらめた	1	
	準備・申請する時間なかった		
	支援を受けられるまでの期間が長く待てなかった・あきらめた		
	このような支援を申請・利用することに心理的抵抗があった	1	
	支援内容がニーズに合っていなかった		
	必要がなかった		
	該当しなかった		
	その他		
支援が必要だと感じる時、どこで情報を得たり、集めたりしていますか。当てはまるものすべてお答えください。	行政や支援機関のサイトを見る	1	4
	行政や支援機関のチラシやパンフレット	1	3
	インターネットで情報を検索する	3	5
	テレビやラジオ		1
	新聞や書籍		
	SNS (Facebook, Twitter など) で情報を見る	1	3
	家族や知人からの口コミ	1	2
	相談先や支援機関からの案内・紹介		2
	その他		

注) 一部項目は複数回答項目可。

出所：川崎市男女共同参画センターモニター調査結果をもとに筆者作成

・ 若年者

若年者の必要な支援のニーズはまず行政情報へのアクセス方法の改善が必要であるように思われた。そもそも若年者は行政情報の収集に労力をあまり割かないケースが多く、迅速かつ手軽に情報収集できる方法を望んでいる。また、相談の際は気軽に相談できるLINEなどを入口とし、その後対面等の相談に移行する等、まず入口のハードルを大きく下げる必要があると思われる。インターネットのホームページ（HP）などもまずチャート図などで示し、各部署へ誘導するなど工夫が求められる。また、SNS世代でもあり情報の更新頻度に敏感である。古い情報が掲示されていると満足度が低下している。

・必要な支援のニーズ

若年者の必要な支援のニーズは心身のリフレッシュできる場であるものの、具体的に日時を指定された場などではなく、より小規模かつ自由に参加できる「ゆるい」場をイメージしているようである。川崎市の特性を生かし、愛着を持てるような場を設けてはどうか、との声も挙げられた。また、ひとり暮らしによる孤独の解消法として、悩みの相談も求める声も挙げられた。支援金・給付金の受給を受けた者からは、手続きの煩雑さや情報収集ルートがわかりにくい、との声も挙げられた。

結構、地域のお祭りとかコロナ前とかよく行っていたので、川崎大師とかのほう、結構やってるイメージがありますね。そういうのもやってほしいなっていう気持ちはあるんですけど、やっぱり密になるとか心配が。屋外だとしてもそういうことがあったら嫌だなって思ってしまうので。いつ開催するってなると集中しちゃうので、(お祭りを) いつでも見に行けるっていう状況をうまく発信して、見に行きたいなとか、そういう気持ちにさせてくれたらリフレッシュもできるかな。(A)

行政のホームページって多分、ごみの出し方ぐらいしか見たことないんですけど。そうですね。行政のサービスを受けるっていうことは、やったことはないですね。(何か申請したことは) ないですね。こんな状況なんで、自分の悩みとかを聞いてくれるところがあればいいなと思いますね。(B)

(個人事業主なので給付金の対象かもしれないが受給していない) 1つは知ってたんですけども、店舗とか持ってないと駄目だと思ってて。さっきの話を聞いて、できたのかなと思ったんですけど。(中略) 野外でヨガとか、1回行ってみたいですね。結構、都心のほうとかでは公園だとかでたまにあるんですけども、それがあまりにも遠かったり、ヨガマット持ってかないといけなかったりっていうと、ちょっと行きづらいというか。実際に行ったことはないので、もし近くでもうちょっと小規模な感じであつたら、行ってみたいなとは思っています。(C)

収入は先ほどの通り、本業のほうでの収入は仕事の本数と規模の縮小で減ったんですけど、いろんな方から教えていただいたり SNS で知った (緊急小口資金、持続化給付金、月次支援金などの) 給付金とか (を申請した)。それに神奈川県で上乘せしてるとかっていうのもあったり、そこは利用させていただいて。実際に最初の年 (2020 年) に、国もあったのかな、東京都と国とかであつて。申請をしたり書類をそろえたりがちょっと大変でした。私は途中で断念しました。私はもう一生懸命探して、手続とかも大変なものは結構、大変だったんですけど、それ

を頑張って。なので何とかトータルの収入としては、明日ご飯が食べられないってということにも何とかならず。ただ、すぐ（支援金が）出なかったので、最初の5月から始まって夏ぐらいは、家賃どうしようっていうのは少しあって。で、持続化給付金をいただいて、何とか生活できるように、安定的にって感じですかね。今現在は漠然と不安はあります。給付金はコロナが落ち着いたらもちろん、全くなくなりほしくないと思うんですけど仕事ってすぐには多分戻らないと思うし。このコロナ禍が落ち着いてしばらくがちょっと怖いって不安があるので、また給付金だったりサポート体制だったりってのが、少し余裕を持って、あってほしいなと今は思ってます。（持続化給付金などの情報はどのように得たか）周りのフリーランス同士で、SNSとかやり取りしたり教えてもらったり、そういう情報を教えていただいて、自分で調べたりもして。調べると知らなかったっていうのがいっぱい出てきた。（申請書類をそろえるのは）相当大変でした。そうですね。やっぱり個人事業の場合、法的な証明書みたいのがなかったり契約書がなかったりするので、それは難しかったですけど。

たまずんって分かりますか。ナマズが多摩川で見付かって、金色でこれぐらいででかくて。多摩区の区役所にあたり、多摩川沿いのせせらぎ館っていう所で無料で見られるんですけど。そういうお知らせがあって。それはお散歩がてら行けたし、無料だし、密じゃないし。リフレッシュっていっても町歩きみたいに、イベントじゃなくてもこういうのがあるから皆さん個々で参加してみてもどうでしょう、みたいなふうがあると、皆さんも参加しやすいだろうし安心だし。（D）

（心身リフレッシュできる場があれば参加するか）そうですね。私の場合は、以前ライブとかそういうエンターテインメントに触れるってのが1番リフレッシュだったのかなって思うんで。でも市がやるっていうイメージ湧かないんですけど。町歩きとかでも好きなので。そういうのに、でも実際、参加するかっていうとちょっと、どうですかね。（コロナで密は避けたいので）そう、難しいかなと思っちゃう。（E）

・情報のアクセス

若年者はSNS（LINE, Twitter, Instagram, Facebook）やYouTube等を比較的日常的に使用している者が多いものの、これらの媒体を通じた川崎市からの発信については見ると回答した者と見ないと回答した者に分かれた。YouTubeも活用してはどうかとの声も聞かれた。比較的、自身が見ると回答した者が多いSNSはLINEであった。若年者においては、SNSを活用した情報発信も有効であるが、媒体が多様であるために取捨選択も必要であると考えられる。また、1つのSNSだけでなく時代のニーズにあわせた様々なSNSの

組み合わせが求められる。さらに、従来通りのインターネットのホームページ（HP）による発信も有効である。ただし、HP 画面が見つらかったり更新頻度が遅いことに対する不満の声も上がった。

また、相談事業についてもハードルの高さを指摘する声があった。この問題を解消する方法の一例として、例えば LINE によるチャット相談や、LINE による簡単な相談受付や相談窓口・問い合わせ先の確認、相談予約をした後、対面または電話での相談につなげる、など入口として SNS を活用し相談のハードルを下げてはどうか、との声が聞かれた。

行政への相談は、必要な書類とかを調べるときに、ネット検索とかで見たぐらいですね。あとは知り合いのお店とかが、協力金とかあるじゃないですか。それを「ちょっと調べてほしい」って言われて、調べたときに利用したっていうぐらいですね。（使用している SNS は）主に LINE と Twitter と Instagram。LINE は日々の連絡ツールとして使うことが多いんですけど、LINE だったら手軽、周りから見られないので、気軽にできるかなって思います。Twitter とか Instagram は情報とかをいろいろ得たりするのに利用しているので、SNS とかでうまくそういう情報とか流してくれたらいいかなって、聞いてて思ったりとかありました。（電話は）待ち時間とか（があるのであまり使いたくない）。時間の都合とかってあるじゃないですか。（電話相談を）やってる時間とか。（それよりは）LINE だったらいつでも大丈夫かなっていう、やりやすいと思いました。（A）

まずはホームページに行くよりは、SNS のほうが勝手に流れてくるのでいいかなと思います。1 番は Twitter。あと YouTube でもいいのかなと思います。（電話の相談窓口はいっぱいとのことだが）電話、あんまり得意じゃなくて、どっちかという対面のほうが話しやすいっていうのもあるので、簡単にある程度まで相談したいこととかを、LINE で事前に報告しておいて、じゃあ後日ここで対面でヒアリングしましょうか、だと、話したいことが分かってるし、スムーズにいくんじゃないかなって思いますね。（B）

私、行政のことって何も知らなくて。行政に相談しようって頭がまずないので。でもここでいろんなお話聞いていたら、まず 1 番に行政なのかなと思って。取りあえず聞いてみるっていうのが大事なかなって思いました。（川崎市から SNS 発信があった場合は）多分、見ないです。よく行く図書館が役所の隣にあって、そういうときは役所の入口のパンフレットとかを見てから図書館に行くみたいなのルートでいつも行ってるんで、そこで（パンフレットを）たまにもらってきたりしますね。（中略）私も、最初どこに、どこの課とかも分からないので、そこが LINE で分かるといいですね。川崎市のコロナの、ほぼ毎日来る LINE の通知が

あるんですけど、あれみたいに LINE で来て、そこからホームページに飛べるとかだと結構、手軽でほぼ毎日見てるので、それを。LINE が1番、通知が多いので、自分の場合は。他の LINE を開いたときに出てくると、開こうって思う。例えばワクチンの状況とかをそこからホームページに飛べたりするので、そういうのは見えます。(C)

そうですね、ホームページだったりインターネットで検索すること。知人友人にこういう制度があるよみたいなのを聞くっていうことですね。(川崎市公式 SNS は) フォローはしてなくて、例えば Facebook でタイムライン見てたら CM みたいに出てくるのがあると思うんですけど、それで知ったりとかっていうのはあると思います。ただフォローしないと見れない情報だとしたら、本当、友達しか Twitter とかインスタもフォローはしてないので。行政のものを、じゃあフォローするかって言われると、それはせずに別にインターネットで自分で検索するかなという気はします。1番、仕事柄見るのは Facebook と Instagram ですかね。いっぱい検索したときに川崎市自体のホームページもちょっと分かりにくくて、どこを見ればいいのか。最初にこういうことを相談したいんですけどどこに載ってますか、だけでも LINE で手軽に聞けたら、すごい時間は節約できるかなと思います。でも長文の相談ってなったらちょっと大変かなと思う。(D)

頻繁には見ないですね。年金の支払いとかの猶予が受けれるのかなとかを、ちょっと調べたりはしたことがある。インターネットで。私自身があまり SNS やってないので、(SNS は) 見てないですね。LINE ぐらいですかね。Twitter とかは単純に活用しないと思う。

(市政だよりもあまり読まないか) そうですね。家に届いてるのかな、ぐらいなので。私が見ないで、母は多分見てると思うんですけど、どちらかというとも親から、こういうのあるよとかいうのが下りてくる感じがします。

(行政への申請はしたことがあるか) 減免とか1度行ったんですけど、2019年までの収入がだいぶ多かったんで、その収入の前年度、その前の年、ちょっとよく分からなかったんですけど、該当しないっていうことで受けなかったんで、行ってももう無駄かなと思って行ってないです。

その相談内容による感じですね。文字に残っちゃうんで。データ流出、分かんないんですけど、流出とかあるかな。込み入った話までは LINE だとできないかなって。最初にどこに相談していいかの入口とか、よく携帯とかサポートセンターなんかで電話する前に、LINE とかでチャット相談できるの使ったことあるんですけど。区役所とか行ってもどこ行っていいか分からないとかあるので、最初の問い合わせだけだったら LINE とかでもある程度いいのかなと。相談の予約と

か。(E)

・ **中年者**

中年者は行政支援に対する情報収集を様々なチャンネルを通じて積極的に行っていた。それ故に行政に対する様々な不満も多い。情報収集のしにくさ、データの更新頻度の遅さ、対象となる行政支援に自身の条件が適合するかの不安、行政サービスの対応の悪さに対する不満、等様々な語りがあらわれた。特にコロナ禍における対応は他の自治体との対応スピード等の差がすぐにわかることから、行政サービスへの失望は不信感に直結している。

・ **必要な支援のニーズ**

必要な支援のニーズに対する語りは多い。行政に対する様々な要望を持っていることがうかがえた。様々な支援制度に申請する者がいる一方、手続きの煩雑さについては不満が語られた。様々な支援制度に自分は該当しないのではないかと、申請が通らないのではないかと、など逡巡する語りもある。支援のニーズは主に金銭面の支援である。

実際、生活保護を受給することにしまして、今、受給しています。完全に収入が途絶えたので、申請をして支援を受けてます。(中略)生活保護だけじゃなくそういう支援とかそういう窓口に行くっていうのもやっぱり正直すごい抵抗がありましたし、例えば生活保護に関してもなんか落ちるところまで自分、来たのかなみたいな感じはちょっと思ったんですけど、本当に切羽詰まってもうどうしようもなくなった感じでしたので。

でも保険とか入ってたので、その場ではすぐ申請ができなくて何回か行ったり来たりというのはあったんですけど、でも最終的には受理はされて、(中略)引越もしなきゃいけない。(F)

持続化給付金というのは申請していただいて、いろいろ給付金ってあるんですけど、例えば家賃とか、自分が本当にコロナに関して収入が減ったのか、単に自分の努力が足りないから収入が減ったのかっていうのを自分自身でも見極められないし、例えば申請して、これ、コロナじゃないんじゃない？って言われたらどうしようとか。私、これ、申請していいのかどうかっていうの分からないですし。だから調べてもやっぱり戸惑ってそのままになっちゃってて、どんどんそれで追い込まれていってはいらるんですけど、そうですね、そういった状況ではあります。(H)

こういう支援金があるらしいよとか(情報があれば)、出せるもの、条件がはまっているものは出した(申請した)。給付金じゃないですけど、もう何回も出したら返され、出したら返され。でもみんな、必死ですよ。お金が、やっぱりもら

わないと。(中略) みんな、本当に生きていくの大変、生活するの大変。とにかく補助でもなんでも、給付でもなんでも、それからやっぱり国民の命を守るためにできることはなんでもしてください。だからワクチンだって3回目、早くしなさいよっていうことでしょう。他の国ができるわけだから、なぜ日本ができないの?っていう。先進国で、なぜ日本ができないの?あと、思いやりも持ってほしい。役所の窓口。(I)

給付金とかいろんなことに関して耳にはしましたけれども、やはり自分には当てはまらないってことで特に考えませんでした。そうですね。なかなかその条件にはまるのが難しい感じが。持続化(給付金)にしてもフリーランスの方、個人事業主の方が対象で、派遣とか雇用されている、保険証を持っている人は駄目なんですよね。条件っていうよりも収入が下がった人を大きく見てあげたほうがいいんじゃないかなっていうふうには思いました。コロナで、人員削減でリストラされちゃった方とか、そういった本当に生活していく中で困ってる人に対して寄付してあげたほうがいいんじゃないかなって思いました。(J)

・情報のアクセス

中年者の情報のアクセス方法は若年者とやや異なり、インターネットのホームページ(HP)や市政だよりが主流である。市政だよりは情報を得る重要な媒体だが、紙面数の制約もあり得られる情報量が少ないとの指摘もある。また、知り合いからの口コミも複数の者が回答した。年代により、市民に届けるための情報媒体が異なることが示唆される。また、一目でわかりやすい(例えばフローチャートのような)入口段階の相談先のわかりやすさを求める意見や、掲載されている情報が古いなどの意見も挙がった。加えて、新型コロナウイルスのワクチン接種時の情報などにも意見が及んだ。感染症拡大という非常時のため行政対応におのずと目が向き、自治体ごとの対応力の差にも関心が向けられるようになっている。

相談事業については、若年者と同じく入口の相談段階のハードルの高さを指摘する声があった。中年者は若年者と比べて積極的に川崎市の支援制度を利用しているが、初めての申請でもあり「わからないことがわからない」状態にあった。さらに、行政窓口で相談することは恥ずかしいことであり、自身の自己肯定感を低めるために相談を躊躇するとの語りもあった。若年者と同じく入口をわかりやすく示し、知りたい情報・窓口にアクセスするための工夫が求められる。

そうですね。インターネットとか、それこそ市政だよりとか。あと、こういう集まりとかでの、知り合った方からのを通じて情報が入ったりみたいのとかっていう感じです。私は特に(行政が遠い存在である)感じはしなかったんですね。

私が今、生活保護を受けてる中で、実際には分かんないことがあったら聞いてね
とは言われても、分からないことが分からない、予想ができないというか。本当に必要なものを、給付金もそうなんですけど、その人が求めている、本当に必要な人のところの情報がちゃんときっちり届けるような、どこにそれを求めていけばいいかってことは、うまくわかるように難しい形にしないで、分かりやすくなれば、それは確かにいいかもしれないです。

確かに市政だよりとかでは、文面とか紙面の制限であまり詳しくは書けないこともあったりもあるのかもしれないですけど、簡潔に、こういうことで困ってる人は例えばこういう所へ行くとか、具体的に記載があれば、確かにそれはいいですよね。(F)

テレビで見るニュースと、あと川崎市の市政だよりはよくポストに入ってるので、そちらを参考にさせていただいたりとか、あとはもう本当にインターネットを見てます。ワクチン接種（の予約の問題）はすごく感じていて、両親の予約を取ってあげようと思ってあれするんですけども、そもそもネットがつかない状況があって、（中略）電話をしたら、「それはもう駄目ってことです」って、それだけで終わられてしまって。（電話を）かけた意味ないじゃんみたいな。会社の方のご両親が〇〇区に住んでらっしゃる方がいて、その方の所なんかはもう3回目の接種が1回目、2回目と同じ会場というか、その時間帯でもう案内が来ると。（中略）〇〇区みたいに、もう最初からあてがって、この日時に来てねっていうのをしてくれたほうがむしろ楽ですね。

（相談窓口とかに電話をするということには）ならなかったです。（電話をかけることに対するハードルは）高いですね。やっぱり、なんて自分って駄目なんだろうって思っちゃうんですよ。人の支援、行政の支援を得なければならないほど自分って能力ないんだなと思っちゃうんです。すごい気持ち的に追い詰められてるわけではないので、その辺はもっと素直になれば行政も頼って、例えば家族も頼ってっていうふうにできればいいんでしょうけどね。（G）

そうですね。最初の給付金が何だって言われてた当時はやっぱいろいろインターネットを見ましたけど、見て、さっきも言ったとおり、自分に当てはまるかどうか分からないし。それで結局、持続化給付金に関しては申請して、もらいましたけど。敷居が高いというより、なんて窓口、小さいんだろうって思うことはたびたびあります。この間、そのワクチンのことに関してインターネットで調べたんですけど、分かりづらい。ここに飛んでくださいってクリックするじゃないですか。そしたらその情報はもう古いんですよ。もう使えない情報しか載ってないかっていうことは、特に市の関係は多いですよ。普段、これまで行政のことな

んて意識して見てなかったけど、コロナをきっかけに見るようになって、その辺はよく見えていますね。(H)

ニュースなんかでぴろっと聞いたりすると、そのキーワードとかを聞いたりとか。大体は、やっぱり情報戦じゃないですけど、情報を知ってないと取りこぼすって言い方はなんかあれですね。でもやっぱりもらえるものがあるんだったら、こんなご時世ですし、いろんなことを考えるともらいたいっていうのもあるから。私は独り者ですし、ひとり暮らしで賃貸のうちに住んでますから、生活費の足しにするっていうレベルですけど、やっぱりこの2年に関してはお金がある程度、支援金があったのと、それから会社をやってますので、そのときの役員報酬じゃないですけど会社のほうから引き出してるお金とかで今、トントンっていうか、何とか切り詰めてですけど(暮らしています)。(I)

やっぱりインターネットが多いんですけども、時々、川崎市のホームページを見たりとか、市政だよりがポストに入りますので、取りあえず全部目を通して、何か自分に当てはまる、給付金だけではなくて川崎市がやっていることに関してボランティアでもなんでもいいんですけど、はまるものがないかなっていうので目を通しています。市政だよりにも紙面の文字数の制限があるのでそれは難しいと思うんですけど、ありきたりの情報しか得られてない。もっと私たちは奥深まった情報が欲しいんですけども、川崎のホームページを見てもやっぱり欲しい情報が載っていないっていうところと、あとワクチンもなかなか予約が取れなくて、検索しても、(中略)もういっぱいですとか、クリックして飛んでっても全然受けられないようなものが載っていたりとか。なかなか予約が取れなかったっていうところは、都内の区に比べても遅かったのかなっていう感じはしました、川崎市は。(J)

第3節 テキスト分析による検証

2-3-1. 分析手法について

本節では、得られたインタビューデータから樋口(2014)の計量テキスト分析の手法を用い、若年者・中年者の語りの特徴と差異を検証する。計量テキスト分析とは、計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理・分析し、内容分析を行うものである(樋口(2014))。使用ソフトは「KH Coder」を用いた。分析方法はどの単語が語りにあらわれたかを分析する「抽出語分析」、単語間の関連がある語を線で結び、プロットすることにより言葉の関係を分析する「共起ネットワーク分析³」の2つを行う。

³共起ネットワーク分析とは、抽出語分析で用いられた単語がどのように結びつき、用いられているかを

抽出語は、名詞、サ変名詞⁴、形容動詞を取り上げた。共起ネットワーク分析は60単語までをプロットし、強い関係（共起関係）を持つほど太い線で示し、また出現数の多い単語ほど大きい円で示されている。

2-3-2. 非正規シングル女性の語り（若年者）

若年者の非正規シングルの語りをテキストデータにし、語りに最も頻出する単語を示したものが表8である。中年者のデータと比較して特徴のある頻出語としては名詞の「ホームページ」「家族」「行政」「子ども」「事務」、サ変名詞の「相談」「転職」「シフト」「フォロー」「リフレッシュ」「一緒」、形容動詞の「手軽」「平気」「メンタル」「気軽」が挙げられる。行政へのアクセスに関する単語、家族に関する単語、人間関係に関する単語等が中年者と比較すると相対的に頻出していることがわかる。

表8 非正規シングル女性の語り（若年者）（抽出語）

名詞		サ変名詞		形容動詞	
感じ	32	仕事	47	大変	12
コロナ	24	相談	12	不安	10
収入	14	給付	8	好き	5
自分	13	生活	8	確か	4
最初	12	転職	7	手軽	4
お金	9	話	7	平気	4
気持ち	9	シフト	6	メンタル	3
ストレス	8	フォロー	6	気軽	3
会社	8	リフレッシュ	6		
役所	8	一緒	6		
ホームページ	7	影響	6		
家族	7	感染	6		
個人	7	電話	6		
行政	7				
子ども	7				
事務	7				

出所：インタビューのテキストデータから筆者作成

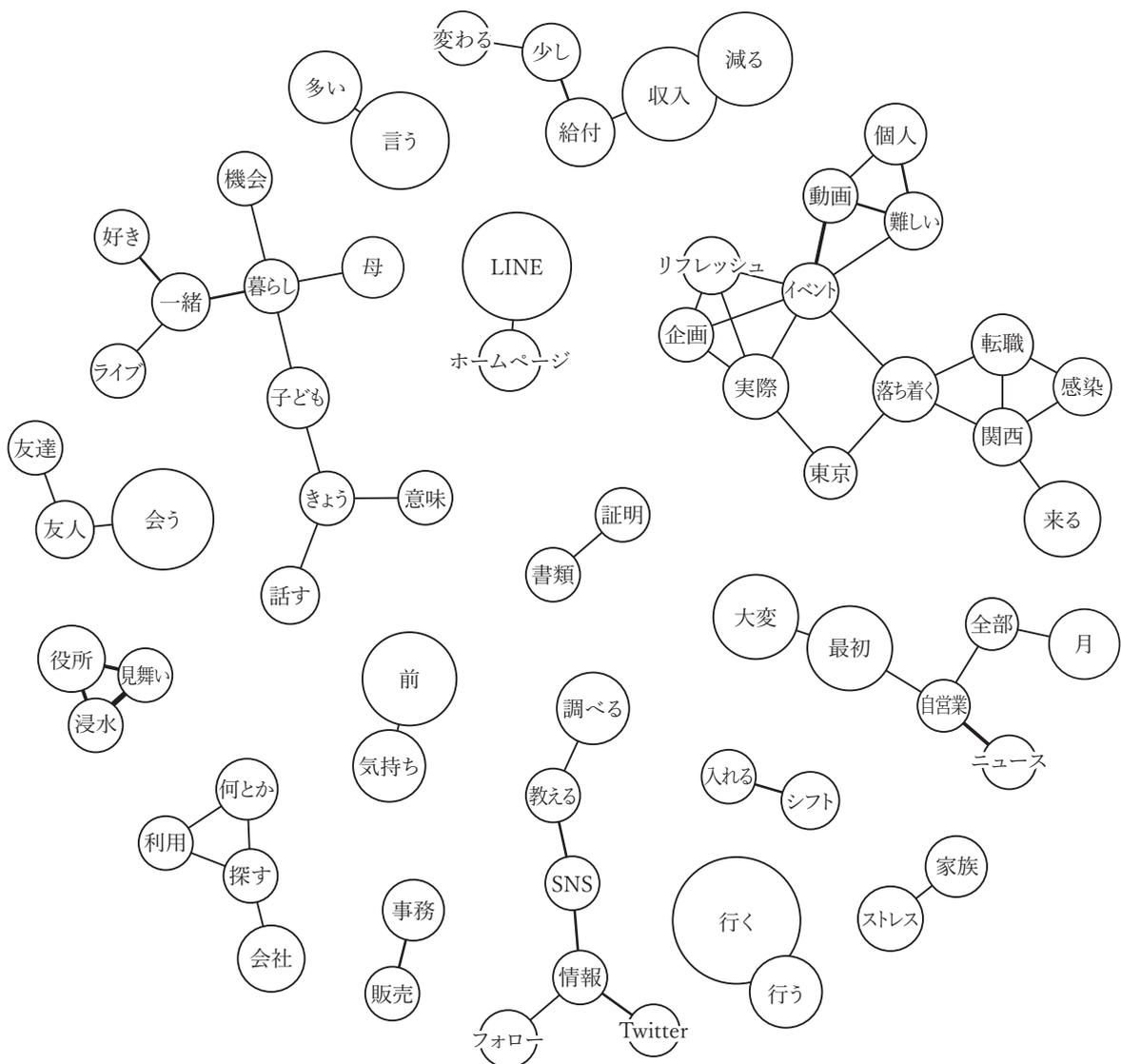
次に若年者の非正規シングル女性に関する共起ネットワーク分析の結果を確認する（図1）。中年者と対比した上で、頻出単語としてより多く挙げられた単語は「LINE」「ホーム

分析する手法である。抽出にあたっては、描画する共起関係は上位60単語を選定した。また、バブルサイズは文字の回数の多さを示している。

⁴ サ変名詞とは、動詞「する」に接続してサ行変格活用の動詞となりうる名詞のこと。

ページ」「収入」「減る」「会う」「行く」等がある。「会う」に紐づく単語は「友人」「友達」であり、友人関係に関する語りがあることが示されている。SNS に関する共起ネットワークも中年者には見られないものであり、若年者は SNS (twitter 等) による情報収集・フォローを行っていることがわかる。「イベント」「リフレッシュ」という用語も若年者の共起ネットワークのみにあらわれており、「イベント」に紐づく「リフレッシュ」の「難しさ」が示されている。その他、「家族」は「ストレス」と紐づいており、「会社」は「探す」「利用」「何とか」と紐づいている。家族に関する問題も抱える一方、仕事については行政に頼らずに自分自身でなんとか解決していこうという共起関係がうかがえる。

図1 若年者における非正規シングル女性の共起ネットワーク



出所：インタビューのテキストデータから筆者作成

2-3-3. 非正規シングル女性の語り（中年者）

中年者の非正規シングルの語りをテキストデータにし、語りに最も頻出する単語を示し

たものが表9である。若年者のデータと比較して特徴のある頻出語としては名詞の「状況」「情報」「ネット」「窓口」「暮らし」「本当」、サ変名詞の「支援」「派遣」「申請」「アルバイト」「登録」「持続」、形容動詞の「駄目」「普通」「緊急」「正直」「楽」「無理」が挙げられる。行政申請に関する単語、否定的な単語、情報収集に関する単語等が若年者と比較すると相対的に頻出していることがわかる。

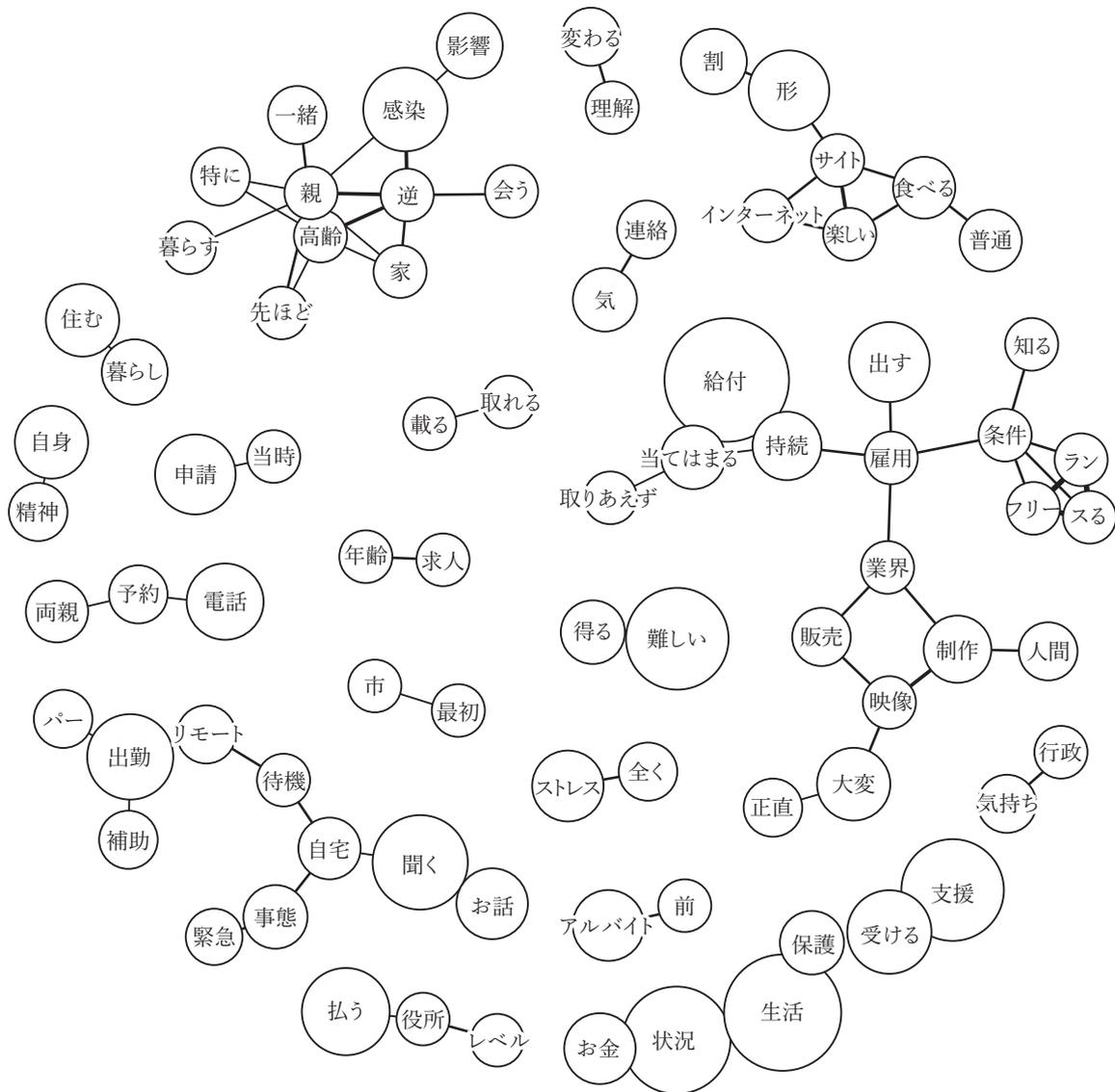
表9 非正規シングル女性の語り（中年者）（抽出語）

名詞		サ変名詞		形容動詞	
自分	60	仕事	60	駄目	13
コロナ	33	話	22	好き	12
感じ	28	給付	21	大変	9
会社	19	生活	19	不安	8
状況	17	支援	16	普通	7
情報	15	派遣	13	緊急	6
皆さん	13	感染	12	正直	6
収入	13	出勤	12	確か	5
個人	11	申請	11	楽	3
お金	9	電話	10	完全	3
ストレス	9	お話	9	簡単	3
ネット	9	アルバイト	9	無理	3
自身	9	登録	9		
窓口	8	影響	8		
暮らし	8	持続	8		
本当	8	制作	8		

出所：インタビューのテキストデータから筆者作成

次に中年者の非正規シングル女性に関する共起ネットワーク分析の結果を確認する（図2）。若年者と対比した上で、頻出単語としてより多く挙げられた単語は「親」「高齢」「給付」「生活」「年齢」等がある。「親」に紐づく単語は「高齢」「感染」等であり、親に関し高齢化が進んでいる語りがあることが示されている。「給付」に紐づく共起関係も若年者には見られなかったものであり、紐づく単語として「当てはまる」「持続」「取りあえず」「出す」等がある。行政支援に関する申請に関する語りがあることがわかる。その他、「インターネット」は「楽しい」「食べる」と紐づき、「年齢」は「求人」と紐づいている。インターネットを用いた積極的な情報収集の一方、若年者にあったような対面での他社との交流などの語りは乏しい。「仕事（求人）」に関する単語には「年齢」が紐づき、年齢の壁が存在する語りを示唆している。

図2 中年者における非正規シングル女性の共起ネットワーク



出所：インタビューのテキストデータから筆者作成

第4節 結果の考察

本節では、インタビュー調査から得られた語りの類型化・分析及び計量テキスト分析から得られた分析結果の考察を行う。先の分類に従った4項目に分けてそれぞれ考察を行う。

2-4-1. 仕事への影響

コロナ禍における非正規シングル女性の仕事への影響は、予想通り大きなものであった。収入減だけでなく失職や転職につながるケースも多く、ついでに職種・業種により影響の大きさには濃淡が見られた。特に女性比率が高い事務職・サービス職比率の高さは本インタビュー対象者でも確認され、これらの仕事の一部がコロナ禍において大きな影響

を受けていることがわかった。また、対人業務を中心とする個人事業主にも影響は大きく及んでいた。一方、収入に影響がない者も数名存在した。彼女たちの特徴は、非正規雇用の中でも経理事務等、比較的専門性の高い業務についていたことが挙げられる。さらに、コロナ禍の影響として仕事の幅の限定が挙げられる。従来やりたい仕事はコロナ禍で失われてしまい、収入を得るために本来の希望と異なる仕事に就いており、ストレスにつながっていると語る者が複数名いた。加えて、コロナ禍で導入されたテレワーク（在宅勤務）導入率は低い。その点においては、テレワークによる感染リスクの減少などの恩恵を享受できず、コロナ前から働き方が変化した者は少なかった。テレワーク利用者は女性よりも男性の方が多くことがわかっているが、本調査でも同様の傾向がみられた。

一方、若年者・中年者ともに減収を補うための副業やダブルワーク、支援金・給付金申請などに積極的に取り組んでいる者も複数存在し、新たな収入源を見出す者も存在した。コロナ禍における非接触・非対面に加えインターネットやアプリなどを活用した新たな収入源を確保し、それを生活の楽しみにも変える事例もあった。予想以上に、コロナ禍の非正規シングル女性はしなやかに新たな道を模索していると感じられた。ただし、年齢を重ねるごとに仕事の選択の幅は狭まっているようである。今後到来すると考えられるAI社会という産業構造の変化を見据え、女性がより長期的に働ける職業のあり方が求められる。

2-4-2. 生活への影響

若年者・中年者ともに仕事面の打撃への対応に比べ、生活面の打撃の影響はより大きいように感じられた。その打撃の内容は若年者・中年者で異なっている。

若年者が最も影響を受けているのは生活の楽しみ、生きがいの喪失である。この語りは複数のインタビューイヤーから語られた。生活の楽しみは人により異なるが、一例としてライブや観劇、食べ歩き、登山などが挙げられた。これらを余暇活動として楽しんでいたものが、コロナ禍で一気に喪失してしまい、毎日職場と家の往復のみになっているとの語りが印象的であった。また、友人・同僚・家族などとの交流も制約され、さらに感染リスクを考え互いに気を配りあっている。その結果として、様々な人間関係が急速に希薄化している。このような生活の変化は、前節の仕事の変化よりもより強いストレスとなっている印象を受けた。

中年者については、若年者に比べひとりで過ごすことの耐性がついており、コロナ禍で人間関係が希薄化したことに対する不満は1人のみであった。家でひとりで過ごすことは問題がなく、むしろ同居家族がいないことによりコロナ感染リスクを減らすことができる、とストレスを減少させているようであった。中年者の場合は親も高齢化しており、自身から親へコロナを感染させてしまうリスクがないメリットを語る声が複数聞かれた。ひとり暮らしでかつ身軽であることが、コロナ禍での対人関係の難しさ、悩み、ストレスを減少させており、予想と異なるメリットを享受していることも明らかになった。

2-4-3. 心身の健康への影響

心身の健康への影響は若年者・中年者ともに「心」に集中し、体の健康については問題がなかった。「心」の問題とは、コロナ禍における「個」の問題から生じている。「個」によるストレスの影響は大きく、寂しさ、無気力といった気持ちの落ち込みを起し、孤立感を募らせている。その点で、家族等と同居している者からはストレスが減少しているとの語りがみられた。一方、ひとり暮らしのインタビューからは、話し相手がいないことによるストレスと、先述したように同居者がいないことによる感染リスクの低下や身軽さといったメリットと双方の語りが得られた。

これに加え、中年者の場合は漠然とした将来不安があるようであった。将来不安の最も大きなものは仕事・収入面の不安であったが、加えて健康面や住まい等まで及んでいた。まずは将来の見通しが持てるような仕事を確保し、続けていくことが重要であるように思われた。

2-4-4. 必要な支援のニーズと情報へのアクセス

必要な支援のニーズについては活発な意見が交わされた。若年者では、必要に迫られた者以外は意識が低いようであったが、中年者はいずれも行政支援制度をよく調べており、意見も多く出された。コロナ禍において行政支援がより身近になったことに加え、自治体間の対応の格差が浮きぼりになり、不満などが表出したと考えられる。具体的には、給付金（支援金）申請、受給手続きの簡素化や分かりやすさを求める声、行政支援の迅速な対応、正確な情報提供などの声が挙げられた。

情報へのアクセスについては若年者・中年者で異なるチャネルを用いているとともに、具体的に利用しやすい案を出していただいた。若年者については、行政サービスを利用しやすいためのキーワードは「気軽」「手軽」である。入口時点におけるアクセスのしやすさが肝要であると考えられる。具体的に提言があったものとしては、入口としてのLINEの活用やAIのチャットボット、各種SNS（twitter、Instagram）やYouTubeの活用等が挙げられた。インターネットも有効である。このように、多様化する急速に変化する顧客対応へのニーズの把握が必要である。一方、中年者については情報収集源としている主流チャネルはインターネットや市政だよりである。しかし、中年者は複数のチャネルから情報を積極的に集めているため、若年者向けの情報チャネルも同じく活用することができると思われる。また、スマホの普及によりいずれの年代も情報の正確さ、更新頻度には敏感である。特にインターネットのホームページ（HP）の正確かつ最新情報の提供が求められる。

第3章 課題の解決に向けて—非正規シングル女性への支援を考える—

第1節 検討委員による提言

本インタビューからは、従来の非正規シングル女性のイメージと異なる女性たちの仕事、生活状況を知ることができた。例えば、横浜市の非正規シングル女性を対象とした調査研究では、本調査と同じく厳しい経済状況、親の介護、孤立などの課題を抱えていることが指摘されている（植野(2014)）。大風(2014)でも、中年未婚女性の場合、家庭内のケア労働が生じた場合に正規就業確率を下げることを実証している。しかし、今回のインタビュー対象者10名の中には、家庭内のケア役割を担う非正規シングル女性はいなかった。

それでは、今回インタビューに参加した非正規シングル女性はどのような人々だったのか。一言でいうと、「自らで身を立てる自立したシングル女性」たちであった。これは、インタビュー選定の過程で、コロナ禍における困難を自ら語ろうという意欲のある女性が集まったためかもしれない。しかし、コロナ禍により身を立てていた収入源が閉ざされ、今後の生活の見通しに苦慮していたといえる。しかし、その中でも新たな収入源を見出し、たくましくシングルとして生きていく女性たちであったように思う。

今後懸念するのは、長期化するコロナ禍に加えてAI社会の到来による大幅な産業構造の変化が到来していることである。現在、産業構造の変化に伴い定型的業務の大幅な減少が予測されている。具体的には、今回の調査対象者の過半数が就いている事務職・サービス職といった業務の置き換えが予想される。その場合、非正規シングル女性の働く環境をめぐり、大きな変化がある可能性がある。デジタル・ディバイド⁵にジェンダー差があることは世界的に共通してみられる傾向であり、UNESCO(2022)も女性のデジタルスキル蓄積不足に対する懸念を指摘している。場合によっては、石原(2021)が指摘する、これまで民間企業中心に行ってきた「リスキニング⁶」を公的機関が側面支援し、女性のエンパワーメントにつなげる取り組みも必要とされるだろう。

さらに中年者の語りに垣間見えたように、仕事の年齢上限の壁は今なお存在する。仕事を続けていくための企業内訓練や自己啓発による教育投資は、非正規雇用者は正規雇用者よりも少ないことが指摘されている（原(2014)）。これは、雇用機会の短い労働者に教育訓練を施しても、その訓練への投資が十分に回収されないと企業が判断しているためでもある（原(2014)）。シングル女性として自立して生きていくためには、中年期に差し掛かるまでにこれからの社会で求められる仕事を把握し、収入源とするための備えが必要であ

⁵ デジタル・ディバイドとは、情報通信技術（IT）の恩恵を受けることのできる人とできない人の間に生じる経済格差を指し、通常「情報格差」と訳される（経済産業省(2001)）。

⁶ リスキニングとは、「新しい職業に就くために、あるいは、今の職業で必要とされるスキルの大幅な変化に適応するために、必要なスキルを獲得する・させること」を指す（石原（2021））。近年では、特にデジタル化と同時に生まれる新しい職業や、仕事の進め方が大幅に変わるであろう職業につくためのスキル習得を指すことが増えている（石原（2021））。

る。企業側や行政も、非正規雇用で働く女性に対し、キャリア・コンサルティングやどの企業でも汎用性のあるスキル形成支援といった施策が考えられよう。さらに、中年期から高年期に移行するにつれ、親の介護の問題が出てくる場合があるだろう。そこで、現在の自立したシングル女性からケア役割を担うシングル女性へと立場が変化し、仕事との両立ということを考えなければならなくなる。そのような場合に備える心構えも求められる。

また、自立したシングル女性たちも、必要に応じて連繋できる場があると自身のエンパワーメントにつながる。先行事例からも参考となるのは、非正規シングル女性同士の連繋の機会創出である。今回のグループインタビューも、限られた時間ながら支援金の対象者や申請方法等、互いに発話しあうことにより貴重な情報交換の場ともなった。また、すくらむ21（川崎市男女共同参画センター）の存在を知らない者も散見され、より身近で気軽な情報交換の場を設けることにより、非正規シングル女性同士の連繋と孤立を防ぐ一助となる可能性がある。作られた場のお膳立てを嫌うケースもあったため、自由に参加できるような形態にすると、非正規シングル女性の安心感にもつながると思われる。

これまで注力してきた女性活躍推進、育児等の両立支援だけでなく、急速に増加する非正規シングル女性の支援とエンパワーメント、情報提供の場を行政として側面支援していく場が今後重要になり、社会的要請として求められている。

第2節 男女共同参画センターでの事業への展開について

今回のインタビューは、ネット調査会社にモニター登録している方のうち、モニター調査に回答した方でインタビュー調査に参加意向を示した方という3ステップの行動を自らとれた方々であり、そのことによる回答者の偏りが生じていることに留意する必要がある。

そのうえで、ここからは、ヒアリング調査の結果から見えてきた川崎市の非正規シングル女性が受けたコロナ禍での影響をもとに、非正規シングル女性に対する男女共同参画センターとしてできるサポートについて考察する。

3-2-1. 気軽に立ち寄れる場所に窓口やサポートメニューの情報を用意する

地域における男女共同参画推進の拠点施設として、男女共同参画センターへの利用を促すだけでなく、サテライトスペースのような形で地域へ出向いていくことを推進していく。孤立を防ぎ、安全で安心して参加できる場を用意し、無理のない形で必要に応じて連繋できる場をつくる必要がある。その際は、自前の施設や公共施設に限らず、非正規シングル女性がアクセスしやすい居場所を用意し、相談機関や支援・制度の情報を提供する新たな機会の創出を推進していく。そのためには、地域の支援団体・企業等との連携をより強化していくことが必要となる。

3-2-2. 同行支援

モニター調査の結果とリンクするが、ヒアリング調査の中でも、行政機関の窓口で情報を得ようとしても、「わからないことがわからない」という声があった。行政の窓口へ行くには構えが必要であるとか、支援を受けることへの抵抗なども感じられた。そこで、同行支援は有用と考えられる。同行支援とは、支援を必要としている人が福祉や自立支援の窓口を訪れる際に、支援者が同行し、支援者を必要としている人に寄り添って利用のサポートをすることである。支援・制度に詳しい支援者が同行することで、疑問や不安が減少し、支援へつながる一歩になると考える。その際には、必要な時に必要な支援につながるができるよう、入口時点でアクセスしやすいLINEの活用などからの情報発信も求められている。その先に、既存の電話相談、面接相談、グループ相談、就業支援講座などの選択肢があると利用しやすいのではないかと考える。

3-2-3. フリーランスで働く方へのサポート

今回のインタビュー調査では、フリーランスで働く方が若年者・中年者ともに今回のインタビューの協力者にいた。長期化するコロナ禍は、フリーランスで働く方の生活面、就業面へ大きな影響を与えていた。具体的には仕事を受注する機会が減少、給付等の申請段階では契約書面等を用意する必要があり苦勞したと語る者もいた。「身体的にはつらいが、働けるうちは精いっぱいやらないと生きていけない。」と語るフリーランスの方がいた。コロナ禍以前から男性が主たる稼ぎ手役割を担い、女性は家庭内のケア労働と補助的な業務をパート労働者として担うという高度経済成長期のもとで設計された制度や慣行の中にあつて、非正規シングル女性が社会保障面では厳しい状況に置かれており、年を重ねることで将来の不安が増幅しているように感じられた。非正規雇用者は正規雇用者と比較しても、就業先から研修等に参加する機会を得ることが容易ではない。フリーランスで働く方にとって時代の変化や環境にあわせて新たな仕事を得る機会や仕事の受注管理する際の知識など、実際に役立つ学習機会をつくることも求められている。

3-2-4. 情報発信

男女共同参画センターができることは限られるが、非正規シングル女性たちのエンパワーメントを後押しし、性別にかかわらず経済活動の主体として女性たちが活躍でき、さまざまな意思決定、選択を自由に行使できるように支援していくこと、また、それを阻害する既存の仕組みや慣行に対して問い直す働きかけも必要である。固定的な性別役割分担意識や無意識の偏見が女性たちの生涯にわたる活躍の可能性を奪うことがないように調査事業や勉強会等を通じて発信していきたい。

センターがパイプ役となり、行政や地域をつなげていくことで、川崎に暮らす非正規シングル女性が直面する困難を解消する一歩にしていきたい。

第3節 おわりに

日本の家族のあり方は急速に変化している。これまで調査研究の中心に置かれていたのは既婚で子どもがいる女性、正社員女性等であったが（植野(2014)）、今回調査を行った非正規シングル女性は今後大幅に増加することが見込まれている。今後、これらの人々への行政支援・目配りはさらに重要性を増し、かつ必要とされている。その理由は、第1章で述べたような大幅な変化とともに、今後の日本社会ではシングルで生きる男女の急増が見込まれているためである。

今回インタビューを行った非正規シングル女性は、コロナ禍において様々な不安を抱えながらも今後も自立して生きていくことを望んでいるようであった。結婚・出産に関する語りがほとんど聞かれなかったことも特徴的である。永井(2016)によれば、未婚者のうちひとり暮らしは3割程度であり、また非正規雇用者と正規雇用者との生活格差は大きなものがある（永井(2016)）が、今回のインタビュー参加者はひとり暮らしがほとんどであり、正規雇用に移行したいという語りも見られなかった。そして、収入面の減少を除いては、これまでの自身の生き方・暮らし方に満足してきた人たちであったように思う。コロナ禍による大幅な収入減や失業・転職にもかかわらず、仕事面では続けられるだけ現在の仕事を続けよう、という者が過半数であった。また、コロナ禍が落ち着いたら自分のやりたい仕事に就くという目標を持つ者もいた。

日本の男女間賃金格差が大きいことはすでによく知られているが、今回のインタビューはひとりで暮らし、節約して生活する限り、自身の収入でなんとか身を立てていける収入水準にはある。しかし、非正規シングル女性が高齢化した時のイメージはまだ浮かんでこない。仕事の選択の幅が限定され、さらに親の介護などのケア労働が加わった場合の仕事がどのようになるのか、どのように働いていけばいいのか、壁に直面するかもしれない。加えて、将来年金などの社会保障制度によるサポートも非正規シングル女性は脆弱である。

今回のような非常時には行政支援によるサポートが必要であるが、現在は大きな社会構造の変革の時期でもある。コロナが収束し平時に戻った時、コロナ禍以前と同様の生活を享受できるだろうか。民間企業では企業内訓練において、非正規社員の職業能力開発の機会は正社員に比べて低く、さらに女性であることが訓練機会を減少させていることが指摘されている（原(2014)）。民間企業においても非正規社員への教育投資が今後到来する労働力不足に対する解決の一つの方策である、という認識を持つことも重要である。企業・行政も増加する非正規シングルを意識したキャリア構築支援体制を構築する必要があり、また非正規シングル女性自身も仕事・生活のあり方を予測し、行動していくことが必要となるだろう。

謝辞

川崎市男女共同参画センターが実施したモニター調査・インタビュー調査にご協力いただいた川崎市民の10名の方に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 石原直子(2021)『リスクリングとは—DX時代の人材戦略と世界の潮流—』リクルートワークス研究所
- 伊予銀行(2022)「ポイ活とは？基本的なポイ活テクニックと注意点を解説」（提供元：全研本社）<https://www.iyobank.co.jp/sp/iyomemo/entry/20211116.html>
(2022年3月11日アクセス)
- 植野ルナ(2017)「非正規職シングル女性が直面する困難と社会的支援ニーズ」『大原社会問題研究所雑誌』法政大学大原社会問題研究所、699巻、pp.33-49
- 近江美保(2021)「COVID-19とジェンダー「危機」と「構造」」『平和研究』日本平和学会、Vol.56(0), pp.27-56
- 大風薫(2014)「中年期未婚女性における家庭内労働と就業：中年期未婚男性との比較による検討」『生活社会科学研究』お茶の水女子大学、21巻、pp.17-28
- 経済産業省(2001)「外交政策 IT（情報通信技術）に関する国際協力・協調」
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/it/kyoryoku.html>(2022年3月11日アクセス)
- 国立社会保障・人口問題研究所(2018)『日本の世帯数の将来推計（全国推計）』厚生労働統計協会
- 周燕飛(2020)「コロナショックの被害は女性に集中（続編）—雇用回復の男女格差—」『JILPT リサーチアイ』第47回、独立行政法人日本労働研究・研修機構、https://www.jil.go.jp/researcheye/bn/047_200925.html（2022年2月28日アクセス）
- 総務省統計局(2021)『令和2年国勢調査 人口等基本集計結果』
- 内閣府男女共同参画局(2021)『男女共同参画白書 令和3年度版』
- 永井暁子(2016)「現代日本における未婚者の特性と経済生活」『季刊家計経済研究』家計経済研究所、No.110、pp.8-23
- 原ひろみ(2014)『職業能力開発の経済分析』勁草書房
- 樋口耕一(2020)『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して（第2版）』ナカニシヤ出版
- 前田正子(2021)「生涯未婚・シングル女性の経済生活」永瀬伸子・寺村絵里子編『少子化と女性のライフコース』原書房、第5章、pp.121-144
- The United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization(UNESCO)(2022)
“*The Effects of AI on the Working Lives of Women*”
<https://publications.iadb.org/en/effects-ai-working-lives-women>(2022年3月11日アクセス)

資料 グループインタビュー調査同意書

川崎市におけるコロナ禍による女性への影響グループインタビュー調査

調査実施者：川崎市男女共同参画センター

調査年月日： 年 月 日

調査の概要

川崎市におけるコロナ禍による女性の暮らしへの影響を調べるため、インターネットでのモニター調査(アンケート調査)を実施しました。その回答者の中から協力者を募り、コロナ禍での仕事・生活・健康への影響についての生の声・生の意見を聞き、見えてきた問題・課題をより深く把握し、今後のセンター事業や市の施策へ反映してくためヒアリング調査を実施します。ヒアリングした内容は個人が特定できない形にまとめ、報告書に掲載させていただきます。

同意書

(調査内容とあなたの権利について)

1. お話いただいた内容は、本調査の目的のみに使用します。答えたくない質問にはお答えいただかなくても構いません。
2. 報告書作成のため、インタビューの内容を録音、調査実施者によりメモを取らせていただきます。録音データおよびメモは調査完了まで調査実施者が責任をもって保管し、その後消去・廃棄します。
3. 録音データおよびメモは、調査実施者のみが扱います。
4. いただいた内容は個人が特定されない形にまとめ、報告書に掲載します。内容については、本調査の目的以外に使われることはありません。報告書は川崎市男女共同参画センターホームページ等で公表いたします。

私は、調査について十分に説明を受け、理解しました。個人情報の秘匿権利の保障が守られることを前提に、インタビュー調査に協力することに同意します。

(本人)

同意年月日 年 月 日

署 名

(説明者)

同意年月日 年 月 日

署 名

川崎市におけるコロナ禍での非正規シングル女性に対する影響調査
インタビュー調査報告書

【発行 者】川崎市男女共同参画センター(すくらむ 21)

【発行年月】令和 4(2022)年 3月

【連絡先】〒213-0001 神奈川県川崎市高津区溝口 2-20-1

TEL 044-813-0808 / FAX 044-813-0864

